

**慶應義塾大学体育研究所  
設立 50 年記念シンポジウム  
報告書**

慶應義塾大学体育研究所



# 慶應義塾大学 体育研究所設立 50 年記念シンポジウム 報告書

## 第1部 50年の歩み

開会挨拶 .....	7
慶應義塾大学体育研究所所長	植田 史生
祝辞 .....	11
慶應義塾長	清家 篤
体育研究所の50年 .....	15
慶應義塾大学体育研究所教授	佐々木玲子

## 第2部 慶應義塾の体育・スポーツを問い直す

司会ごあいさつ .....	24
慶應義塾大学体育研究所教授	近藤 明彦
大学における競技スポーツ ——NCAAの諸規定を参考に、そのあり方を考える—— .....	26
慶應義塾大学体育研究所准教授	加藤 大仁
スポーツにおける大学と地域の連携 ——大学発の総合型スポーツクラブの提案—— .....	33
慶應義塾大学体育研究所准教授	須田 芳正
大学体育教員の使命 ——カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとともに—— .....	38
慶應義塾大学体育研究所准教授	村山 光義
ディスカッション .....	43
指定発言者	慶應義塾常任理事 長谷山 彰



## 第1部 50年の歩み

### 開会挨拶

慶應義塾大学体育研究所所長 植田史生

### 祝辞

慶應義塾長 清家 篤

### 体育研究所の50年

慶應義塾大学体育研究所教授 佐々木玲子





## 開会挨拶

慶應義塾大学体育研究所所長

植田史生

本日は体育研究所開設50年記念シンポジウムに清家塾長、長谷山常任理事をはじめとして、多数の方々にご臨席いただき慶賀の至りでございます。また、OBの木村元所長、森下元所長にもご出席いただいております。本当にありがとうございます。

まずこの50年の間、歴代の所長はじめ多くの所員、非常勤講師並びに実技指導員の皆様、体育研究所を担当していただきました主事並びに事務職員の皆様に衷心より御礼申し上げたいと思います。

体育研究所は50歳になったわけですが、残念なことを2点申し上げたいと思います。まずこの50年間、周年行事が開催されなかったということです。先輩たちが少なくなるなか、歴史を知り未来へとつないでいくためにも本日開催できたことは大変喜ばしいと思います。もう1点は、同僚の松田准教授が昨年帰らぬ人となり本日を迎えることができなかったことです。本当に残念でなりません。

50年記念シンポジウムの第1部は、50年の歩み。第2部は慶應義塾の体育・スポーツを問い直す。というテーマでシンポジウムが行われます。活発な議論を期待したいと思います。

僭越ではございますが50年ということで体育科目の経緯について少しお話をさせていただきたいと思います。

皆様ご存知のこととは思いますが1949（昭和24）年、新制大学発足にあたり、大学設置基準により保健体育科目が設置され、講義科目として体育理論、保健衛生が各1単位、体育実技は基本体育、選択種目体育が各1単位の計4単位の必修科目として実施されることとなりました。特に体育実技・基本体育は、日吉校舎が米軍に占領されていた状況下において実施するには困難

を極めたようです。選択種目は、体育会の協力を仰ぎ28種目からスタートし年々種目数が増加し充実していったものと思われます。

一方、基本体育は、1950（昭和25）年10月、日吉キャンパスの米軍からの返還により、翌年から1クラス年間を通して実施する方式がとられ、女子体育も確立し、大学通信教育部の体育実技も行われるようになりました。また、病弱者に軽体操を設けたことは特出すべきことであると思います。

1958（昭和33）年、慶應義塾100年記念事業において日吉記念館、記念館別館（体育館）、1960（昭和35）年日吉プールが竣工し体育施設が整備されるに至り、基本体育は、週1回、合同体操・球技（バレーボール、バスケットボール）・武道（柔道、剣道）・体操、陸上・水泳（女子はダンス・バレーボール・バスケットボール・水泳）をローテーションする方式で行いました。選択種目体育（男子38種目、女子17種目）は、体育会各部の協力のもと、夏・冬の休暇中に10日間集中して行われました。この時、泳げない学生は水泳を履修し、「塾生皆泳」のスローガンのもと50メートル泳ぐことを目標にしました。

「塾生皆泳」は小泉先生が標榜され有名な言葉になりましたが、「皆泳」というこの言葉はハーヴァード大学で使用されたようです。諸説あるようですが、そのひとつは1912年のタイタニック号沈没までさかのぼります。映画にもなり有名な話なので皆様ご存知だと思います。4月14日夜、ニューファンドランド島南方沖の北大西洋上を処女航海中に濃霧の為冰山に衝突。翌日未明沈没。乗客、乗員2224人中死者は、1513人を数えました。この海難事故でハーヴァードの学生が、数人

死亡しました。その中の一人に Harry Elkins Widener 氏がいました。彼は客室においていたグーテンベルク聖書をとりに戻った為に帰らぬ人となりました。その後 Harry Widener の母は、彼の蔵書を基に図書館を寄贈します。その図書館が、Widener 記念図書館です。その時の条件が、大学の学生すべてが水泳の試験をパスし泳げるようになる事。学生が、24時間いつでも図書館が使える事。そして、すべての寄宿舎での食事のデザートに息子が好きだったアイスクリームが必ずある事の3点だったそうです。このことによりハーヴァードでは、「皆泳」が目標となりました。しかし現在は、1970年代に水辺の近くに済んだ経験のない学生に対する差別に当たるとか、1990年代になると身体が不自由な人に関する差別にあたるという理由で「皆泳」ではないようです。

福澤先生は、1890年の大学部設置にあたり、ハーヴァード大学に数名の教授の推薦を依頼しています。その後、多数の教員、学生が留学するなどハーヴァードとの関係は周知の事です。「皆泳」に関しても深いつながりがあるようです。

日吉キャンパスが整備されるなか、本研究所は、「体育学およびその諸関連科学の研究と教育を行うこと」を目的として、1961（昭和36）年に各学部に分散所属していた体育担当専任教員を中心に19名の専任所員をもって、現在日吉図書館がある場所に開設されました。当時、体育学部を有しない総合大学で教員が学部を離れ研究所として体育の必修科目を担当するという事は、他大学にない慶應独自のものであり体育教育の重要性と実現可能な研究活動ができる環境をいち早く確立したものと思います。

日本経済が飛躍的に成長を遂げた時期は、1954（昭和29）年12月から1973（昭和48）年11月までの19年間でありますが、その中間に位置する1961年の出来事を振り返りますと、6月に本州・四国に集中豪雨、9月には第二室戸台風、10月には西日本に豪雨があり多くの死者・不明者が出ています。

今年も同じように、3月11日14時46分頃、宮城県三陸沖を震源とする東日本大震災が発生しました。世界史上4番目に強い地震であるとのこと。地震災害発生後、未曾有の津波災害、その被災による福島県にある東京電力福島第一原子力発電所事故、風評被害と四重の悪夢の連鎖がおきました。被災地、被災者の

皆様には哀悼の意を表しますとともに、一日も早い復旧、復興を祈念するばかりです。この大震災時の被災者の皆様の冷静な行動は世界中から称賛されました。日本ではなぜ暴動が起きないのかと。日本人の持っている道徳心、特に東北人が持っている誠実さと粘り強さ等々、豊かな人間性が感じられます。

このことは、身体的にも精神的にも体育・スポーツの持つ特性と符合するのではないかと思います。

また、他の出来事ではジョン・F・ケネディがアメリカ第35代大統領に就任しました。ソ連では、ガガーリン少佐を乗せた世界初の有人人工衛星「ボストーク1号」を打ち上げに成功し、「地球は青かった」と名セリフを残しました。スポーツでは、大鵬、柏戸が揃って横綱に昇進し「白鵬時代」が到来し、女子バレーボールチームの日紡貝塚が、海外遠征より無敗で帰国し「東洋の魔女」と言われました。柔道では、オランダのヘーシンクが第3回柔道世界選手権で優勝し外国人が初めて世界チャンピオンになりました。映画では、「用心棒」、「荒野の7人」、「ウエストサイド物語」、「ティファニーで朝食を」、「風と共に去りぬ」などが公開されています。流行歌は、「君恋し」、「ガラスのジョニー」、「上を向いて歩こう」、「銀座の恋の物語」、「ムーン・リバー」、「GIブルース」などがヒットしています。

その後、1975（昭和50）年には、協生館の位置する旧屋外プールと陸上競技場の間に建設されました。かくいう私は、1973（昭和48）年に義塾に入学し1977（昭和52）年卒業と同時に奉職致しました。学生時代にできた建物であり、レンガ色の立派な建物で思い入れも強いものがあります。

2008（平成20）年、慶應義塾創立150年記念事業によりスポーツ棟〔2008（平成20）年に完成〕に移転しました。

1992（平成4）年まで必修科目であった体育は、大学設置基準大綱化によるカリキュラム改訂により教養教育再編のなか1993（平成5）年、選択科目になりました。授業内容については数年かけて大幅な見直しを行い、実技科目においては学生の多様なニーズに対応したスポーツ種目（男女共学）を展開し、1クラスの定員を30人程度の少人数にすることにより学生の参加意欲の向上を図りました。必修時代の基本体育・選択科目体育をウィークリー種目・シーズン種目と変更し、球技・武道・フィットネス・ニュースポーツ・野外等の45種



目の中から選択できるようになりました。講義科目においても個々の教員の専門性を活かし、講義名にサブタイトルを付けるなどの多彩な試みを展開しています。カリキュラムの見直しにより、実技・講義を通して身体・運動全般に関わる広範な知を学生に提供し、身体活動全般についての積極的関与を促す教育活動を展開しています。

本来大学でやる体育の意味は、一般学生に対して保健、体育の基本的な知識をきちんと教えることと、将来に向け体力を維持発展させるように実技に興味を持たせることであると私自身は思っています。

日本の展望——学術からの提言 2010（日本学術会議日本の展望委員会 知の創造分科会 平成 22 年 4 月 5 日）によると、「大学教育における体育・健康教育は、高校までのような多面的・包括的な教育課程によって制約されるものではないが、心身の健康維持や選択した種目の活動を通じての技量形成・仲間づくりに加えて、保健体育の意義、身体の理と自然や生活様式などとの関係についての理解を深めるという点でも重要である。さらに言えば、この教育・学習活動は、芸術関連の活動とともに、非言語的な表現能力・コミュニケーション能力の形成という点でも重要である。学問知が主に言語を媒介にして事物・事象の本質を捉え思考し表現するのに対して、保健体育や芸術はそれらを含みつつ、情念・情意や感性と言われるものを始め、知性に収まりきらない人間性の深所を抉り出し、それを表出・表現する活動である。体育や芸術の活動における自己表出・自己表現の作用は自己発見や事故との出会いの契機として、また、体育・スポーツにおける集団活動や芸術鑑賞は他者との共感・連帯・対話の契機として、豊かな人間性・市民性を培うという点でも重要であろう。さらには、日常生活においても、表情。身振りや振る舞い方などの非言語的要素が対話や人間関係や集団的活動の場を豊かにすることも言うまでもない。そうした多様な意義を持つものとして、保健体育科目を豊かなものにしていくことも重要である。」と身体知の必要性を提言しています。

現在、体育科目の履修者は減少気味です。しかし、組織的に多数の塾生に教育していくことは重要なことだと思います。義塾の伝統と精神を基礎にして、授業のみならず課外活動としてのスポーツ振興（スポーツイベントや施設開放等）は重要な教育局面と我々は捉え

ています。キャンパスに体育・スポーツ実践の場を作り、塾生が幅広く運動を習慣化し、身近なものにする「行動力のある塾生を育成する」ことを目標に掲げ、塾生と対峙し、塾生とのかかわりを強化しなければならないと思います。

また、健康な体づくりをトレーニングや運動によって体験し、健康・体力の維持、増進の必要性に気付くようサポートすることが体育実技教育の役割であると思います。このことが生涯スポーツを実践していく一助になると確信します。将来に向けて、運動やトレーニングによって塾生自身の健康・体力の維持・増進をはかり、感動体験と基本的な知識・理論習得を基礎とした教養教育が重要であると考え、スポーツのできるキャンパスづくりを推進することが我々の使命であると思います。

研究分野では、現在の体育学は健康・スポーツ科学領域へと拡大し、研究対象が一層細分化され、多様化してきています。我々もこうした体育学、関連諸科学の多様化に対応していく必要があり、一層の自覚と意識を高め、実行に移す努力が重要であると思います。多様化する研究対象の中から重点的な研究テーマを掲げ、組織的に取り組む必要があり、個人の専門性を生かすことと、共同研究体制の必要性和実行力が不可欠であると思います。

実践的な研究・教育活動が「慶應義塾」、「塾生」、「社会」への還元をするとともに、先導的な役割を果たすよう所員一同銘記しなければならないと思います。平成の今年今日ただいまも体育研究所の歴史の一通過点であり、今日の今は慶應義塾 153 年、体育研究所 50 年の先端であり永遠の時の通過にしかすぎません。時はうつり変化もあると思いますが、何とか渭水の流れを守りたいと思います。

最後になりますが、体育研究所設立 50 年委員会の委員長佐々木教授はじめ委員の皆様にご協力いただきました皆様にお礼と感謝をこめて私の開会の挨拶を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

(写真撮影 井上 悟)





## 祝 辞

慶應義塾長

清家 篤

本日は慶應義塾大学体育研究所設立50年、誠にありがとうございます。慶應義塾を代表して心からお祝いを申し上げます。また植田史生所長をはじめ、歴代の所長、所員の皆様、体育研究所の運営に関与されてこられたすべての皆様のご尽力に対し深い敬意を表し、また感謝を申し上げます。

慶應義塾大学の体育研究所は義塾内外のさまざまな方々に支えられて運営をしております。本日ご臨席を賜っております皆様方には、日ごろより体育研究所に多大なるご支援、ご協力をいただいておりますことをあらためて心より御礼を申し上げます。

私も昔、もう今から40年近く前になりますけれども、大学に入ったばかりの日吉において、体育の授業で先生方に変にお世話になりました。私は外部から入学いたしましたので、受験勉強から解放されて実技の授業で久しぶりに体を動かした時のうれしさを今でも覚えております。また、その体育の実技授業でペアを組んだ友人ととてもよい友達になったというような経験もございます。

言うまでもなく、教育において体育というものはさまざまな意味を持っているわけです。とりわけ大学における体育教育には、身体能力の向上、あるいは保健知識の涵養、さらには将来のレクリエーション能力の向上といった意味もあるかと思いますが、何よりも体育という学問を学ぶという意味もあるかと思えます。

どのようにしたらよりよく身体を鍛えることができるか、あるいはどのようにしたら技量を高めることができるかということ、実技と理論の両面から理解し確認をしていくということでもあります。どうしたらもっとうまくなるのか、スポーツを楽しめるのかということを試行錯誤し、そして先生方の指導を受けながら自ら技能の

向上方法を習得して、よい結果を出すということです。

これはまさに、問題を見つけてその問題を解決するために自分なりの仮説を作り、そしてその仮説を試行錯誤の中で検証して結論を導くという、学問の方法論にもつながるものがあると思っております。つまり、塾生が体育を受講し経験することによって、自分の頭で物を考えるというプロセスを得られると私は思っております。どうしたらもっとうまくなるか、あるいは競技種目であれば、どうすれば試合に勝てるのかといったことを先生方あるいは指導者に学び、そして自分なりに考えて工夫をしているということです。

その意味では、私は体育の授業、あるいは学生のさまざまなスポーツ活動というのは、技能向上という体験を通じて、正しく理論と実技の関係を理解する。そのうえで自分の頭で考え、問題を解決する能力を磨くとてもよい機会になっていると信じております。

私は体育の授業とはまた別に、例えば慶應義塾体育会の活動に対して常に「文武両道でお願いします」と言っているわけですが、これはもちろん「勉強もスポーツも一生懸命やってください」ということでもありますが、同時に「スポーツもまた自分の頭で物考える力を養う勉強の機会だ」という意味でもお願いをしているわけです。

そうした自分の頭で物考える能力は、特にこれからの時代に大切になってくると考えております。2011年3月11日の東日本大震災のような、まさに想定外といわれる自然災害はもとより、今日の私どもの社会は、例えば地球環境の温暖化であるとか、あるいは最近大きなニュースになっております各国の財政危機であるとか、あるいは日本などに代表される人口の少子高齢

化といったような、社会構造の持続可能性そのものが問われるような大きな変化の時代に直面しているわけです。そうした大きな変化の時代には、過去の延長線上で物を考えたり、問題を解決したりすることが難しくなっていきます。むしろ新しい状況を自らの頭でしっかりと理解し、そしてその理解に基づいて問題を解決する能力が求められています。

福澤先生は西洋の学校教育視察を通じて、従来の知育に加え体育の必要性を高く評価され、慶應義塾はいち早く「ジムナスティック＝体育」を教育内容に取り入れた学校として知られています。

また、福澤先生が教育について、「まず獣身を成して而かる後に人心を養う」と体育の重要性を説かれたこともよく知られているところです。その意味では、もちろん体育教育というのはどんな学校でも大切なわけですが、とりわけ慶應義塾において行われる体育教育には特別な意味があると思っております。

特に大学において行われる体育教育は、先ほどから申しておりますように、「体を鍛える」、あるいは「保健の知識を高める」ことと同時に、それが自分の頭で物を考える力を養うとてもよい機会にもなっていることが大切だと思います。そうした質の高い慶應義塾の体育教育を担っておられるのが、体育研究所の先生方であり、これからも体育教育によって慶應義塾の教育の質を高めていただいくものと信じております。

また体育、あるいはスポーツにおいては、他の分野と同じようにさまざまな形の技術革新＝イノベーションによって、その恩恵を多くの人々が利用できるという意味でも、福澤先生の強調した実学の精神につながるところがあると私は思っております。

よく知られている例ですが、走り高跳びの跳躍法は私が子供のころはベリーロールが中心でした。しかし、1960年代の半ばぐらいにアメリカ人の競技者だったフォスベリーが、これを苦心して背面跳びという技術を開発し、それを自らのものとしてメキシコ五輪で優勝したというエピソードがあるわけです。

私はこの話で特に素晴らしいと思うのは、フォスベリーが自ら苦心して金メダルを取ったということもさることながら、フォスベリーが金メダルを取った後、彼よりもずっと身体能力の優れた選手が、この背面跳びを取り入れて実行してあっという間にフォスベリーを上回る記録の向上につながったということです。そ

の意味ではフォスベリーの貢献というのは、単に彼自身のためだけではなくて、スポーツ界全体のために寄与したというところが、素晴らしいことではないかと思っております。

体育の持つもう1つの素晴らしさは、これはもしかすると副次的な効果かもしれませんが、それが人と人を結び付ける効果を持っているということです。チームを組んで行う団体競技はもちろんのことですが、個人競技においても相手がいるわけです。よく知られておりますように、ソサエティーという言葉に福澤先生は「人間交際<sup>じんかんこうさい</sup>」という訳語を当てられて、人と人との関係の中で個人が触発され高められることの重要性を唱えられました。

これはチームスポーツでも個人スポーツもそうでしょうが、クラブを形成して行われることから分かりますように、スポーツは福澤先生の言われた人間交際の場としても、とても大切な役割を果たしています。

この点に関して申しますと、最近では学生の中になかなか友人をつくることのできない者もいると言われております。私は体育の授業、特に実技の授業は、どんな引っ込み思案の青年であっても、否応なく他の学生と言葉の意味においても、身体的にもコミュニケーションを取らざるをえない場になると思います。

先ほども申しましたように、私自身の経験から申ししても、実は体育の授業というものを通じて新入生が新しい友達をつくるという効果も、私は少なくないのではないかと考えています。

本日のシンポジウムにおきましては、今後慶應義塾の体育研究所がどのような方向性を持って展開をしていかれるかということをあらためて考え、提言をされる機会になると伺っております。これを機に慶應義塾における体育教育をさらに高め、慶應義塾の教育研究の質がますます向上するような展望をぜひ描いていただきたいと思っております。

皆様方、特に外からお見えのお客様には、もしお時間があれば後でこのスポーツ棟の周りを散策していただきたいと思っております。慶應義塾日吉地区におきます体育施設は、ここ数年でかなりの改善を見てきておりますが、これらの施設の改善には体育研究所の皆様方のご尽力なり、またそこで蓄積された英知が生かされております。これらの新しくなりました環境も活用していただきながら、塾生の体育教育とスポーツ研究の質

をさらに高めてくださることを確信しております。

あらためて体育研究所設立以来の半世紀に及ぶ関係各位のこれまでのご努力、ご尽力に心から感謝を申し上げますとともに、慶應義塾の体育教育、体育研究がますます発展しますよう祈念申し上げまして、私のお祝いのごあいさつとさせていただきます。

(写真撮影 井上 悟)



# 体育研究所の50年

慶應義塾大学体育研究所教授 佐々木玲子

体育研究所の佐々木と申します。50年の歴史を振り返るには非常に短い時間ではありますが、私が内容を少し選ばせていただき、「50年の歩み」というテーマでお話をさせていただきたいと思ひます。50年ということで、現在の体育研究所所員は全員立ち上げのときにはもちろんおりません。この会場にいらっしゃる方の中には、立ち上げのときにいらした先生のお顔をお見受けしましたので、たぶん先生方の方がよくお分りのところもあると思ひますし、私の理解がもしかすると違っているところもあると思ひますが、決して話の途中で「そこは違うぞ」というふうなことはおっしゃらないでいただければと思ひます。一応後で終わってからこっそり教えていただければ幸いです。

それでは、「50年の歩み」ということで始めます。1961年に慶應義塾大学体育研究所が設立された当時に何があったのかというところを少し見てみますと、「柏鵬時代の幕開け」とあります(図1)。知らない人もいられるかもしれませんが、柏戸と大鵬の両力士が横綱になったということで、その両者の時代の幕開けだということですね。

先ほどの所長のお話で歴史をたどっていただきましたので繰り返すところもあるかと思ひますけれども、このころ世の中は東京オリンピックに向けてどんどん元気になっていく時代だったと思ひます。体育研究所自体は1961年に立ち上がるわけですが、その以前からすでに、1949年に新制大学が発足して体育科目は必修として行われていました。

教員が体育研究所という組織としてまとまる以前に、大学の中で体育を授業として行うには、非常に並々ならぬ準備が必要だったわけで、後ほどお名前をお出ししますが、初代体育研究所所長の浅野均一先生が、大学で体育が始まる際に非常にご尽力されました。さらにそれから10年の間先生を中心に、組織としてはまとまっておりませんでした。が、「何とか体育の授業をいい形で」というふうな上を向いてやっていたという時代かと思ひます。

体育研究所発足当時の所員は19名で(図2)、何名かは私が入ったときにもいらして、ご一緒させていただいた先生方のお名前が懐かしく見られます。ちなみに私自身は体育研究所に入って25年目ですので、ちょうど半分ということになります。

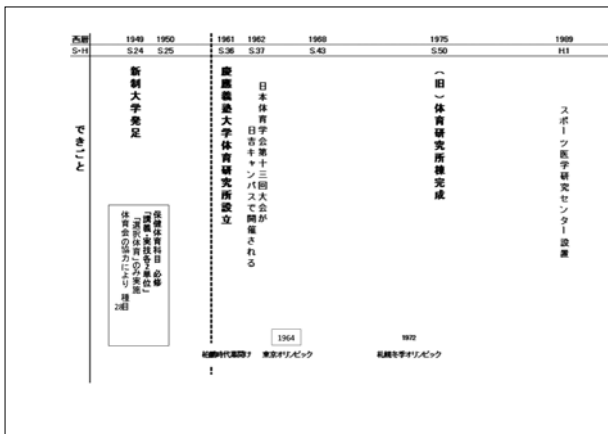


図1

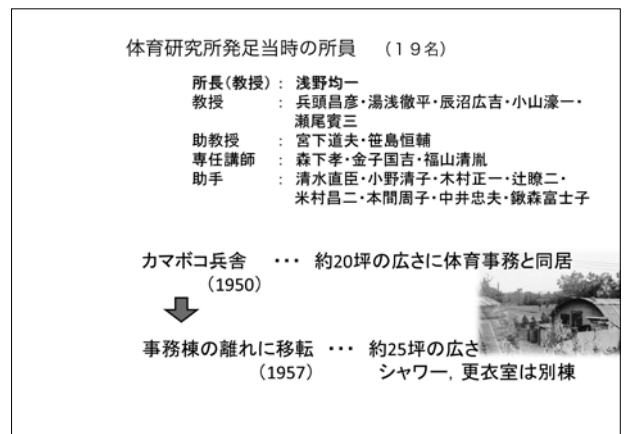


図2

日吉キャンパスが米軍に占領されていたのが1949年までですが、その後には図2の写真のような場所にあったようです。これはどうも実際に体育研究所のあったところではないようですが、こういった雰囲気のある場所ということで写真を入れさせていただきました。19名もいながらこういった狭いところで、施設としては今と比べものにならないほどで、「まだまだ体育を快適にやっていくにはなかなか大変な状況でなさっていたんだな」ということが分かります。

図3に1961年から1991年までを表記していますが、この時期が保健体育科目が必修であった時代になります。そのときの風景を古い写真から出させていただきましたのでご覧ください。上の写真は陸上競技場での体育の授業風景です。真中は水泳の授業ですが、このように大勢の学生が50メートルプールに一堂に集まって泳いでいました。下の写真はスキー場です。1972年頃は体育研究所棟がまだ建つ前ですが、札幌冬季オリンピックも行われ、日本の中で短い間に2回のオリンピックが行われました。スポーツに関しては世の中ではまだまだ身近なものとは感じられなかったかもしれませんが、大衆が「スポーツを見る」という時代であったのかなと思います。

それでは、体育が必修だった時代を大まかにまとめてみたいと思います。浅野先生が最初に立ち上げた体育授業の原型を引き継いだものが図4になります。「基本体育」と「選択種目体育」とありますが、体育の授業が始まって1年目は基本体育というのは場所がなくてできずに、選択種目体育のみで始まったということです。

選択種目体育は1966年には33種目が挙げられてい

ますけれども、体育会の協力によってこれだけたくさん種目を展開することができたということです。

基本体育とは週に1回、普通の時間割の中で行っていく、いわゆる授業としてイメージできるものです。一方、選択種目体育は場所もそれぞれですし、日吉キャンパスやそれ以外のところを含め、シーズンスポーツという形で今につながっております。これらの科目が1単位ずつ、それに加えて講義科目の「保健衛生」と「体育理論」がやはり1単位ずつで、合計の4単位で必修科目として保健体育が成り立っていたということになります。

ここに挙げてありますのは男子の例ですが（図4）、黒丸が付いている種目を必ず全員が行いまして、あとの3つの白丸はそれぞれこのどちらかを取る、というように、誰もがいずれかのパターンの中に収まるような形で運動をすることになります。

所長の方から小泉先生の「塾生皆泳」のお話がありましたけれども、これは『三田評論』の中に小泉先生が寄稿された文でして、「塾生皆泳。これが私の当面の理想である。かつては弓馬槍剣の技に通ずることは日本武士のたしなみであった。同時にこの世においても青年学生の必ず心になければならぬいくつかの儀礼がある。そして水泳は実に私の指を屈せんとする第一のものである」というふうになります。この文章の中には、先ほどのハーバードのお話を思い起こさせるような部分もあります。

「親にもらった大切な体を、泳げないがためにおぼれて失うなんていう親不孝なことをしてはならない」、あるいは「おぼれている人を助けられなくて、そのままずすごと見過ごすなどということはいけない」と

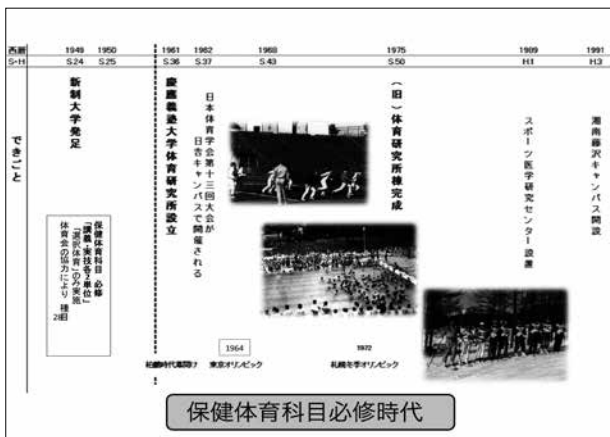


図3

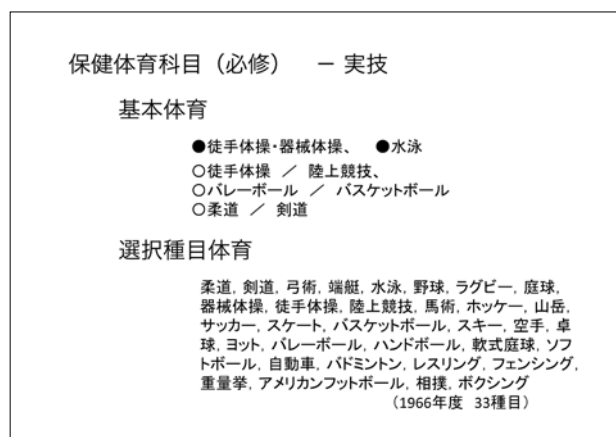


図4



ということが書かれています。そして「慶應義塾々生よ、皆な泳げ」という言葉に結ばれています。

このように、1949年から始まってしばらくは、「体育科目をいかに円滑に学生たちのためにやるか」ということに力を注いできた時期だと思われます。『体育研究所紀要』の初期のころに書かれている論文には、「学生に対して体育をやることの意義」など、そういった内容のものがいくつか見受けられます。そのように考えながら、よりよい授業を目指して進んできたのかと思います。

そして、1975年には今はなき旧体育研究所が建てられます（図5）。このシンポジウムに合わせて制作された『設立50年記念誌』の表紙の色は、この建物のレンガ色をイメージして選ばせていただきました。私などはこの建物の方が長いわけですから、思い出としてはこの場所だということになると思います。

図6は体育研究所の前に広がるグラウンドで運動をしている様子です。これは陸上競技の授業ですね。それから、図7はこのグラウンドの反対側にありました



図5



図6



図7

屋外プールです。塾生時代の思い出として、「泳がされた」と言われる方が非常に多いようなのですが、やはりこういった多人数の中でみんなが泳げるようになるための1つの手段として、「まずは泳げるかどうかをテストしてみよう」ということをやらざるを得なかったのではないかと思います。しかしそれで、「泳げるのに好きじゃなくなっちゃった」など、そういうことになってしまったシステムはちょっと問題があるかもしれません。ですが、ベースにあることは先ほどお話ししたとおりですので、もしそういう経験がおありの方はご容赦いただきたいと思います。

右下の写真には指導しているスタッフが映っています。皆さん変わっているような気がしますが、今この席の中にもいらっしゃる方が何名も写っています。水泳の授業などは、体研のスタッフが総動員で指導に当たり、それに加えてこの人数ですから外からの非常勤の先生にもお手伝いいただいたということです。それから時が進みまして1991年に大学設置基準の大綱化がありました（図8）。これが体育研究所の流れとしては大きな変換点というか、あらためていろいろ考える機会になったかと思います。保健体育科目が必修から選択へと移った経緯ですとか、それからどのようなことをしてきたかということは、この『記念誌』の方にも書かれています。

慶應義塾大学は比較的早く1993年に選択制に移りました。このときに体育科目も必修から選択へ移るということで、「教育の場として考えた場合には必ずしも授業を受けるだけではなく、その課外の部分にも教育の場はある」ということをあらためて考え直す、あるいは「その中でどのようにしていくべきか」ということ

を考える機会になったかと思えます。これ以降、保健体育科目の選択制の時代ということになります。

選択制となり、先ほどの必修から変わった部分もたくさんあります（図9）。システムとしては、体育実技のⅠ（ウィークリースポーツクラス）とⅡ（シーズンスポーツクラス）に分かれており、これらはそれぞれ基本体育と選択体育の流れを受けています。

ウィークリースポーツクラスは、先ほどの水泳のようにものすごい人数ですとか、場所の制限などいろいろな条件によって無理やり詰め込まれていたクラスを、その種目が「どのぐらいの人数、あるいは場所が適切なのか」ということを考えまして、種目数を増やしたり、あるいは同じ種目でもコマ数を増やしていくということを考えて、1995年時点でまずは24種目を開講いたしました。これは、学生の人数や、場所・施設・用具といった問題、あるいは「どういうスポーツをやるのが学生にとって有効なのか」という条件を勘案しましてまずは24種目となりました。

一方、シーズンスポーツクラスは40種目とかなりいろいろな種目を開講しました。今では他大学でもかなりさまざまなスポーツ種目を展開しているところがあると思いますけれども、それに先駆けてこういった形でいろいろな種目を学生に経験させることが可能となったということです。ここでもやはり指導にあたって体育会のご協力をいただきました。

それから、「体育理論」と「保健衛生」の講義科目についてですが、体育理論も以前は何人か決まった教員が担当していましたが、もう少しそれぞれの専門領域を生かした形で、誰でもが講義を持つという形に変えています。

1996年時点で、ウィークリースポーツクラスは選択制ということもあり、学生の延べ人数が1年間で6,641人、シーズンスポーツクラスは1,826人が履修しました。ただ、これは選択になったということで、もちろん全員ではなく、「体育を経験しない」という学生が出てくるのが1つの問題と考えられます。

必修から選択になったということで、「授業を取らない」つまり授業という形では運動しない学生が出てくることも考え、課外活動なども含めた分野で積極的にスポーツを振興していくことが非常に重要だということが認識されまして、体育研究所の中に「スポーツ振興委員会」を設置するという運びになりました。

また、こういった大きな転換の時期にこの先の方向性を定めるべく、「将来構想委員会」という委員会も設置されました。この頃から「スポーツセンター構想」の議論が研究所内でもされるようになってまいりました。このスポーツセンター構想の考え方としては「体育研究所の発展を目指して新たな枠組みの体育、スポーツ活動を行うための拠点をつくる」ということにあります。単に施設としてそういうセンターを作るのではなくて、塾内の他の機関との連携を視野に入れて、その交流の場として機能させ、かつそれを実現する（ハードだけではなく）ソフト面の構築が必要だということです。このようなセンターができた折には、「ウェルネスサービスオフィス」ということで、必ずしも体育の授業だけではなく、「健康」などそういう事柄すべてにかかわりのあるところをソフト面で一括していく機能としての場が必要であるという考えです。

当時は、体育研究所がありましたグラウンドの辺り一帯をこういったスポーツセンターにするということ

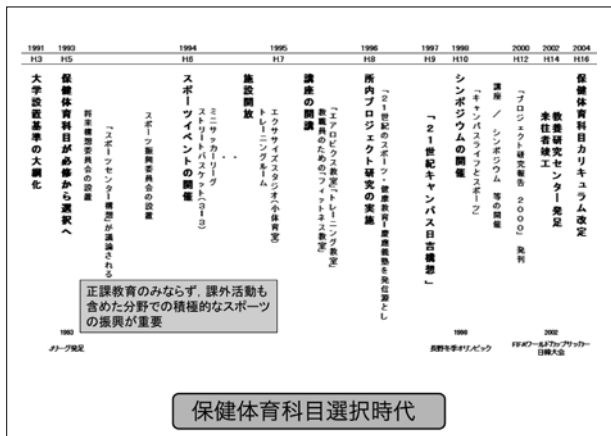


図8

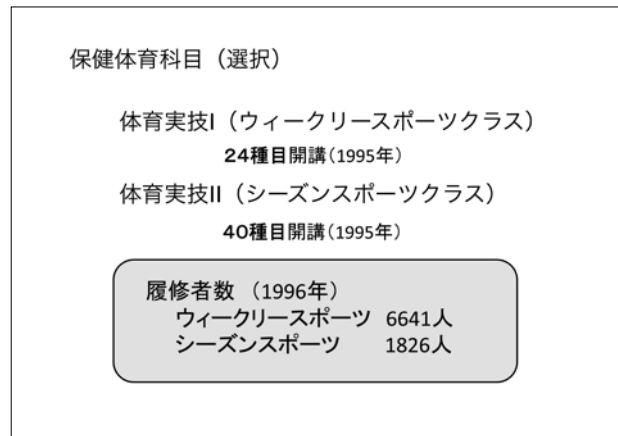


図9

で考え始めていました。しかし実際には、今協生館の建っているところに当たりますので、そういった機能を持つ施設にはなりません。しかし、それであきらめてしまうのではなく、ソフトということですので必ずしもどこかに何か建物があればということではありませんので、この体育研究所をスポーツに関することを取りまとめる機関としたいという考えに至ります。例えば、学生はよく体育研究所の受付に来たときにスポーツ医学研究センターと間違えたり、保健管理センターと間違えていることさえあります。何か「スポーツと付いているとどこにいても同じなのか」、あるいは「どこにいったらいいのか」という状況にも遭遇しますので、「学生が一箇所で情報を得ることができる場があるといいな」ということを考えていた時期ということになります。そして、その考え自体は今も続いているわけです。

ということで、大綱化以降、体育の授業が選択制になり、それ以外のところでもどうやって学生に教育をし、スポーツを振興していくかということに非常に熱が入り始めた時期でした。この時期には、塾生を対象としたスポーツイベントの開催を始めました。一番初めに行ったのはストリートバスケットで、今はもうあまり聞きませんが、スリー・オン・スリーのゲーム、それからミニサッカーリーグというところから始まりました。それが現在の塾長杯のいろいろなスポーツ大会へつながっています。

それから施設の開放です。体育研究所の場合は、例えば専門の学生がそこでゼミをやるとか、そういったことは今の段階ではありませんので、なかなか授業以外の場面で学生が出入りするということがなかったわけですが、研究所内のいろいろな施設（エクササイズスタジオやトレーニングルーム）を非常に狭い場所ではありますが、少しずつ開放して学生が出入りするにぎやかな場所にしていきたいという思いで始めました。

それから公開講座の開講ですが、学生だけではなく、教職員のために何か提供できるものはないかということで始まりました。これも最初は「教職員のためのフィットネス教室」ということで、トレーニングとかエアロビクスなどといったものを体育研究所の中で教職員の業務終了後の5時半ぐらいから始めて、週に1回、ある期間行うところから始まりました。それが今のスポーツ教室や公開講座につながっています。



図 10

図 10 は塾長杯のバレーボール大会の初期の頃の様子です。実際に優勝チームが塾長からトロフィーを受け取っている場面ですね。下の写真はTシャツをそろえて教員チームが真剣に学生と対戦しているという場面でございます。だいたいいい線まで行って負けるのがいつものパターンで、非常にいい感じだなと思います。

こういった教育面は非常に重要な項目ですが、もう1つやはり私たちは大学に勤めております研究者という面もありますので、そういう意味でもますます研究活動を活性化していこうということもこの頃あらためて話し合われました。それまでも個々にそれぞれ研究活動は行っていたわけですが、体育研究所として何かチームでやっていくような、組織としてやっていくような研究活動も加えていくということが始まりました。それが所内のプロジェクト研究です。まず始めは「21世紀のスポーツ・健康教育——慶應義塾を発信源として——」というテーマで、自然科学系、人文科学系、それぞれの専門分野をいくつか分類しまして、その成果を出していこうというプロジェクトが始まりました。いずれにしても、ここをきっかけに体育研究所が動いてきたというような気がいたします。

それから、先ほど申しましたスポーツセンター構想というのは、大綱化以降の教養ということを見直すという観点から、21世紀の教養のキャンパスである日吉を発展させていこうという日吉全体の流れを受け、そこにどのようにして体育研究所として貢献できるかということが、この考えに至る発信源になっているわけです。

それからシンポジウムを開催するというのも、研究所の中の事業として展開し始めました。やはりこの

あたりを全部取りまとめていたのが、新しくできたスポーツ振興委員会になります。最初に行ったのは「キャンパスライフとスポーツ」というテーマで何回かのシリーズにわたってのシンポジウムでした。

このあたりはとにかくそれぞれで分担というよりも、研究所一丸となってと言いますか、みんながひとつのところに力を注いでいったという時代かと思います。この日吉キャンパスの活性化、発展を期して、2002年に教養研究センター発足し、また来往舎ができました。このときに、来往舎へ体育研究所から4名ほど移りまして、このスポーツ棟が建つまで教養研究センターとのパイプ役というような意味合いも含めて在籍しておりました。

それから、2004年には保健体育科目のカリキュラム改定があり、これも大きな仕事だったかと思います(図11)。このカリキュラム改定で大きく変わったところとしては、「体育実技A、B」という成績評価に新たな種類を設けたということがあります。それから「体育講義」、「体育学演習」というように分け、今まで体育の講義のみであったものに加え、それぞれの研究テーマを日吉の学生と一緒に学んでいくという形を取るような演習形式の授業を増やしたということです。

また、これまで講義が1単位であったのを座学の講義は2単位化するということが、大きな変化かと思えます。それからシーズンスポーツクラスの数も少し絞るということもありました。なかなか以前の必修時のように集中授業としてたくさんの学生がいろいろなところに散らばって、十分な人数で実施できるということでもなくなってきましたので、その辺を少し整理して、その一方でウィークリースポーツクラスの方に新たに

組み込むということなど、少しずつ変えながら改革をしていきました。履修者数としましては、シーズンスポーツクラスは減っていましたが、質を重視して頑張っているということかと思えます。

ただ、体育を取らなくなってしまった学生というのも増えるわけなので、そちらに対する対応ということもどうすれば一番いいのかということは、これからも考えていかなければいけないことかと思えます。今、日吉キャンパスの中で自然科学系の実験を文系の学生にどのように教えるかということの取り組みをされていると思いますけれども、もしかすると体育などでもそういうことが可能かなと思ったりもします。たとえば「自分が動くパフォーマンスをどうやって測れるか」、などということを短期の授業の中でやってみたり、アウトドアレクリエーションという新たな授業ではみんながディスカッションするタイプの演習を行っています。このように、今までの形とは違うことを探りつつ新たなものを見つけていこうという取り組みを進めてまいりました。

最後になりますけれども、2008年の慶應義塾創立150年に当たって協生館が建設されることになりました(図12)。あのスペースで私たちが考えているようなパフォーマンスが展開できるかなというところを思い悩みまして、新たなところへという決断をしたわけです。旧体育研究所の取り壊しから新棟(スポーツ棟)移転までの間、藤山記念館の2階に2年ほど移転することになりました。

旧体育研究所が取り壊されていく姿を見ると、寂しい気持ちになりましたけれども、次の新しいところへと前向きに考えて、このスポーツ棟へと移ってまいり

体育科目(選択)	
体育実技A・B	(ウィークリースポーツクラス) 32種目 (シーズンスポーツクラス) 14種目
体育学講義	8テーマ
体育学演習	4テーマ
履修者数(1996年)	
ウィークリースポーツ	5825人
シーズンスポーツ	284人

図 11

2005 H17	2006 H18	2007 H19	2008 H20	2011 H22
協生館建設のため、藤山記念館2階に移転				
(旧)体育研究所棟・藤山ビル取り壊される				
YOKOHAMA F.C. 慶應義塾大学体育研究所が建設				
スポーツ棟(体育研究所)竣工				
慶應義塾創立150年記念「ナショナル」の開催				
体育研究所新棟・藤山ビル取り壊される				
慶應義塾創立150年				
「ナショナル」研究発表 2005 実施				
協生館・陸上競技場での授業始まる(秋学期)				
慶應義塾大学体育研究所設立50周年				
記念シンポジウムの開催				
2011 ならびにジャレシ ウェアの افتتاح				

図 12



図 13

ました（図 13）。ここはもともと卓球場があったところですので、地下に卓球場を置いております。

このスポーツ棟については、先ほどのスポーツ構想の議論の中で体育研究所として「どんな機能を持ったら良いのか」など、それまで話をしてきた内容を実現していくということを念頭に、内部の造りや建物全体ができあがったと理解しております。受付ではやさしい事務のお二人が学生の対応をしてくださっています。

この建物ができまして、2008年に記念フォーラムを行いました。それから協生館ができまして、ここには新しい陸上競技場と屋内プールも入って、総合的なスポーツを楽しむことができる施設になりました。それから協生館という名前にもありますように、社会との連携を行えるような施設ということで、授業でもここを十分活用し、スタジオやトレーニングルームを使っ



図 14

て展開しております。このように、より広く日吉のキャンパスを十分を使って体育研究所のスポーツ展開ができつつあると思います。

こうして今日のシンポジウムの日を迎えることができました。図 14にあるような写真は毎年必ず1枚、2枚では済まない数がありますが、まあこういった色々な顔がこれまでの50年の中に存在して、なんらかの力を与えてくれたということと思います。

非常に短い時間でしたので、50年というにはあまりにも雑駁でありましたけれども、ここまでは前座ということで、過去を振り返りました。これからの体育研究所ということでいいますと後半のシンポジウムにご期待いただきたいと思います。

どうもありがとうございました。



## 第2部 慶應義塾の体育・スポーツを問い直す

### 司会

慶應義塾大学体育研究所教授 近藤明彦

### シンポジスト

慶應義塾大学体育研究所准教授 加藤大仁

慶應義塾大学体育研究所准教授 須田芳正

慶應義塾大学体育研究所准教授 村山光義

### 指定発言者

慶應義塾常任理事 長谷山 彰

## 司会ごあいさつ

慶應義塾大学体育研究所教授

近藤 明彦

第2部は「慶應義塾の体育・スポーツを問い直す」をテーマに、体育研究所の中堅の先生方にご自身の専門分野での研究、海外留学の経験、塾内での教育研究活動、さらにはボランティアとしてのスポーツ振興活動を通して、「体育はどうあるべきだろうか」ということについてお話しいただくことを企画しました。

これから3人の先生にお話しいただく内容は、体育研究所の所員全員で打ち合わせて決めた内容ではございません。3人の先生のそれぞれに思いがあり、「こういうことは問題じゃないか」、「こうした方がいいんじゃないか」というお話をするとのことです。そして、3人の先生にお話しいただいた後、常任理事である長谷山先生に一言感想を述べていただき、それを元に会場の皆さんとディスカッションをさせていただきたいと考えております。そのディスカッションの内容等を踏まえて、今回のシンポジウムの内容が今後、体育研究所の活動の方針等に反映されていければと考えております。

そもそも「体育」という言葉は、明治期にできた言葉で、教科に体育という言葉が使われたのは戦後の新しい学制になってからということです。体育の授業はそれ以前は、体操とか体練という言葉で表されていました。体育の授業のコンテンツを考えてみますと、ギリシャ時代から脈々と流れている健康の保持増進等を目的にした体操の流れや、体を鍛えるトレーニングが含まれています。

現在ですと「体育＝スポーツ」ということで、体育と並列あるいは同じような意味で「スポーツ」をコンテンツとして授業は行われています。そもそもスポーツは、語源的には遊びという意味合いや、気分転換という意味も含まれています。このように体育のコンテンツも時代の変遷に従ってだいぶ変わってきているということです。

スポーツが授業科目の中に入ってきたのは、イギリスのパブリックスクールの校長であった、トーマス・アーノルドが取り入れたことが端緒です。いわゆる授業ではなく、寄宿舎の学生たちにフットボールを行うことを認めたところからスタートしました。今でも英国ではフットボール等の球技をゲームと言っているそうです。そして、ゲームを通じてチームでのメンバーシップ、あるいは対抗することによる克己心を培い、「自分の力をどうやって発揮するか」を考えさせるという、そんな教育プログラムとして使われているという状況です。さらには、創造性を涵養するということで、ダンス等も取り入れられて来ています。このように体育の授業で使われているコンテンツはたくさんあります。

実際に「体育・スポーツ」と表記した時に、体育関係者の方以外ですと体育研究所と体育会のやっていることが間違っ使用されたりします。「体育会」という名前も時代の変遷によって使われ方が異なり、慶應義塾ではいわゆる運動競技部の団体のことを体育会と言いますが、例えば東京大学の場合は「運動会」と言います。なぜこのような違いが生ずるかという、「運動」という言葉の方が若干古い言葉であり、「体育」という言葉が新しい言葉だという流れも背景にあります。そうすると、我々も体育やスポーツという言葉はどうとらえていいのかはなかなか難しいところがあります。

今回、私とシンポジストの3名とでシンポジウムについて事前に話し合いを持ち、「体育研究所は教育研究機関である。」「教育をする観点からコンテンツをどうとらえていくか?」、「教育としての体育、スポーツの在り方はどういうものだろうか?」ということについていろいろ話をさせていただきました。



そういった議論を踏まえて、3名の先生方にはそれぞれのご経験を通じて別々のお願いをしたいと思っています。

まず、加藤先生にはアメリカでの留学経験から、NCAA とのスポーツ競技団体のリクワイアメントについても非常にお詳しいので、「同じ運動部で運動するとしてもただ勝利至上主義にいけないのか」、「学生スポーツの本分とは何か」という問題についてお願いしてあります。先ほど清家塾長もお話しされていた文武両道の話はどうとらえるのかということをお話を通じてお話しただけだと考えています。

2番目の須田先生はサッカーをご専門とされ、ヨーロッパに留学された経験もあります。ヨーロッパでのスポーツの展開は学校教育中心ではなく地域クラブ中心で展開されています。日本でもJリーグができたあたりから、いわゆる地域クラブ構想、総合クラブ構想というのが出てきまして、それをどう展開するかということが課題になっています。一方、大学についても「地域に開かれた大学」というニーズがあり、その中で須田先生はサッカー部の監督という立場も踏まえて、地域のクラブという形で地域貢献のアクションを起こされています。こうした活動はどうあるべきなのか、あるいはどのような課題があるのかということもお話しただけだと思っております。

そして最後に村山先生には、「体育教員として体育の授業をどう考えるか」という我々の根幹の部分、具体的には、「教育の主たるカリキュラムの中をどう展開して、どう考えたらいいのか」ということをお話しただけだと思っております。

以上で、私の最初のごあいさつを終わりとして、これからシンポジウムを開催させていただきたいと思っております。長丁場になりますが、どうぞよろしくお願いたします。

# 大学における競技スポーツ

—— NCAA の諸規定を参考に、そのあり方を考える ——

慶應義塾大学体育研究所准教授 加藤大仁

## I. はじめに

ただいま近藤先生にご紹介を頂きました加藤です。今日は、「大学における競技スポーツ」というテーマでお話させていただきます。

さて、大学スポーツをはじめとする学生スポーツのあり方が問われるような事件は、毎年必ず起きています。例えば、今年の9月、高校体育連盟は、2004年のインターハイで優勝した福岡第一高校男子バスケット部の留学生選手に年齢詐称があったとし、優勝を取り消すとの発表を行いました。

大学に関わる話ですと、2004年8月と2007年3月に起きたプロ野球からの裏金問題で、裏金を受け取った選手に対して、退部など、非常に厳しい処分が下されたことを憶えておられる方も多いのではないのでしょうか。

このような事例から得られる教訓は色々あると思いますが、何れのケースでも、「学生スポーツとはどうあるべきか」、ひいては「学生の本分は何なのか」ということをしっかり議論し、なんらかの共通理解を得ていくような努力をしていかない限り、今後も同じようなことが繰り返されることになるのでは、と感じます。

特に、大学レベルの競技スポーツに関しては、高校体育連盟や中学校体育連盟のような各種スポーツを横断するような形での統括団体は存在しません。各種目の大会を運営している大学連盟や競技団体は、多くが脆弱な財政基盤の下で、有力校出身のOBが、ボランティアという形で運営に携わっているというのが実態です。そのため、競技団体によっては大学間の利害対立が、出場資格などのルールを決める時にも反映されることになりかねません。

10数年前の話ですが、高校卒業と同時に実業団入りし、実業団リーグで活躍していたプレイヤーが、実業団の

チームを辞めて、大学に入学してきました。この選手に、大学リーグへの出場資格を与えるかどうか話し合われたのですが、以前は出場資格を与えることに強く反対していたある大学の監督が、自分の所にも元実業団選手が入学してくるようになった途端、賛成に回るようになったことがありました。若干性格は異なりますが、既にプロとして活躍していた福原愛が早稲田大学に入学した際、規定を変えてまで大学での大会に出場することを認めた卓球協会の判断などは、資金不足に悩む競技団体による苦肉の策と考えられなくもありません。

何れにせよ、このような事例は、「学生スポーツとはどうあるべきか」、「学生の本分は何なのか」、さらには「プロとアマチュアの違い」といった点に関する議論が欠落していたがために引き起こされた、ご都合主義的な判断ということもできるのではないのでしょうか？

ところで、カリキュラムや入試制度をはじめ、大学のあり方にかんして議論が行われる時、欧米の大学、中でもアメリカの大学が、よく引き合いに出されます。

そこで、今回は日本と同じように、大学レベルでも学校中心にスポーツが展開されているアメリカの状況を紹介し、大学スポーツのあり方について考えてみようと思います。

## II. NCAA（全米大学体育協会）とは

実は、これまでもアメリカの大学スポーツに関する紹介は様々な形で行われてきました。しかし、その多くは現場での指導法や、施設の状況に関するものが殆どで、アメリカの大学スポーツが、どのような理念の下に展開されているのか、またどのスポーツの現場にどのようなルールが課されているのかを記したものはそれ程多くありません。スポーツ関係者でNCAAと

という言葉を知らない人はほとんどいないでしょうが、NCAA が各種目のコーチを中心に組織された団体だと誤解しているような人がいることも事実です。

NCAA が作られたのは、1905年、アメリカン・フットボールの試合中に死者や怪我人や多数出たことに対し、当時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトが、このままでは大学フットボールを廃止するとの声明を出したのがきっかけです。この声明を受け、各大学は協力して IAAUS (Intercollegiate Athletic Association of United States) を設立しました。その後、IAAUS は1910年にNCAAと改称され、現在に至っています。

そもそも、アメリカの大学対抗戦は、今から遡ること約160年、1852年にイエール大学とハーバード大学の間で、ボートの対抗戦が行われたのが始まりです。その後1859年にはアムヘルド大学とウィリアム大学が野球の対抗戦、そして1869年にはプリンストン大学とラトガース大学がフットボールの対抗戦を始めました。その後野球が、そして1890年代になるとフットボールの対抗戦が非常に盛んになり、ゲームのある日には学生が教室からいなくなるといった現象も起きたようです。

当時大学に進学するものは一部富裕層の子弟に限られ、一般の人々が存在を意識することなど殆どなかったアメリカの大学が、スポーツを通じ、初めて一般大衆の興味を引く存在となった訳です。大学対抗戦での勝敗は、大学OBからの寄付金の額にも影響するようになり、大学間でのスポーツをめぐる競争はますます過熱していきました。その結果、各大学は、有名なコーチを招いたり、有力プレイヤーの獲得すること力を入れるようになっていったのです。同時に、まるでプロアスリートのように、フットボールチームの助っ人として、各大学を渡り歩いてプレーするような学生も現れるようになりました。

こうして、当初は学生主体で運営されていた大学対抗戦は、スポーツ・オンリーの学生が出てきたことや、アスリートのプロ化、金銭の流れが不透明であるといった問題が明らかになるにつれ、徐々に大学当局が運営に関与するようになっていったのです。1880年代半ば以降には複数の大学間で競技ルールや学業、収支報告に関する共通のルールを取り決めるようにもなりました。NCAAの設立は、このような歴史の延長線上にある訳です。

初めのうちは各種目の競技ルールを統一することに力を入れていたNCAAですが、1921年に陸上競技の大会を開催してからは、徐々に他の種目の大会運営にも関わるようになり、1952年にはTV放映権を管理するようになりました。

TV放映権の管理と大学スポーツ、中でもアメリカンフットボールとバスケットボール人気の高まりに後押しされて、徐々に組織を拡大していったNCAAは、1973年にデビジョン制、つまりデビジョンⅠからⅢの分類を導入し、デヴィジョンによって大学が持たなければならないチームの数や、奨学金の人数制限などに違いを設けることにしました。

例えば男子バスケットボールの場合、現役学生アスリートに与えることができる奨学金の限度は、デビジョンⅠで13名、デヴィジョンⅡは7名、デビジョンⅢは無しとなっています。

### Ⅲ. NCAAの目的

TV放映権の管理に見られるように、NCAA存在それ自体が、アメリカの大学スポーツは大学経営の一部であるという性格を象徴しています。そして、アメリカの大学、とりわけデビジョンⅠに所属する大学では、スポーツ事業が経営の一部に組み込まれています。だからこそ、NCAAは大学スポーツを統括する団体として、様々なルールを設けているのです。

つまり、スポーツが大学経営に不可欠な存在と認めたいうえで、「学生スポーツ」という建て前が崩されないようにするための自治組織がNCAAなのです。

この点を確かめるために、NCAAの目的がどのように定めているか見ておきたいと思います。そこで、NCAAの規定を掲載した“NCAA マニュアル”という冊子を開くと、NCAAの目的として、**図1**のように9つの項目が挙げられています。このNCAA マニュアルという冊子は、NCAAに所属している大学のアスレチック・デパートメント、これは大学体育局のことですが、そのスタッフやコーチなら、必ず手元に置いています。NCAAのウェブサイトを開くと、PDFファイルとしてダウンロードすることもできますので、NCAAのルールに興味がある方は、是非チェックしてみてください。

また第1条第3項には、NCAA加盟校における競技

## NCAAの目的

### 第1条第1項

- a) 大学スポーツプログラムを展開、発展させる。
- b) 各機関が、NCAAの規定に沿って活動すべくサポートする。
- c) スカラシップ規定、アマチュアリズム等の遵守を励行。
- d) 競技規則の制定。
- e) 競技成績の記録。
- f) NCAAが後援する地区及び全米競技会の監督。
- g) 他の協会と協力して、全米大会、国際大会をプロモートする。
- h) 大学スポーツに関わる諸問題の規制と監督。
- i) 大学スポーツの競技レベルを維持するための研究や、基準の設定。

図1

スポーツは、教育プログラムの一環としてデザインされていること、また学生アスリートを一般学生と同じ教育プログラムに組み込むことによって、プロスポーツとは一線を画していること、更に、NCAA加盟校はその精神を尊重した上で、NCAAの諸規定を遵守すべきこと、違反があった場合には、NCAAから処分が下されると書かれています。

つまり、NCAA傘下にある大学の学生アスリートは、先ず第1に学生として大学の教育プログラムに参加することが求められる訳です。後で紹介しますが、NCAAの規定により、学生アスリートは毎年一定の成績を取める必要があります。そのため、勉強そっちのけでプレーすることや、まるで助っ人のように、複数の大学を渡り歩くことはできないようになっています。

## IV. NCAAの諸規定

ところで、先に紹介した“NCAA マニュアル”の中には、組織原理やメンバーシップ条件を定めた「基本原則」、選手としての学生アスリートとしてプレーするための条件やアマチュアの定義、練習時間などの条件、スカラシップ等について定めた「運用規則」、ルール違反に対する処罰手続きなどを定めた「管理規則」など、非常に事細かなルールが定められています。最新版である2011-12年のシーズンのものは、デビジョンIの場合、目次も含めると426ページにも及ぶ、非常に分厚いものです。

今回の発表の目的は、「学生スポーツ」のあり方について考えることです。そこで、今日は数あるNCAAの

## <学業上の基準>

### 入学時の基準

- ✓SAT/ACT及び高校等での成績の提出が求められる。
- ✓SAT/ACTの基準は以下の通り。

Core	GPA	SAT	ACT	Core	GPA	SAT	ACT
3.550 & above		400	37	2.500		820	68
3.525		410	38	2.400		860	71
3.500		420	39	2.300		900	75
3.450		440	41	2.200		940	79
3.400		460	42	2.100		970	82
3.300		500	44	2.000		1010	86
3.200		540	47				
3.100		580	49				
3.000		620	52				
2.900		660	54				
2.800		700	57				
2.700		730	60				
2.600		780	64				

\*SAT I のCritical ReadingとMathのスコアのみ。Essayは含まれない。  
\*SAT II の科目テストの基準はない。

図2

規定の中でも、学生としての本分と関わりが強いと思われるものをいくつか紹介させていただきます。

### ★学業に関するルール

#### a. 入学時の基準

大学に入学する際、芸術やスポーツに秀でているということは大きなアピールポイントになります。もちろん学業成績がさっぱりというのでは話になりませんが、実際多くの大学では、学業以外の領域で優れた才能を持っている者や、何らかの受賞歴などがある者に対しては、学業成績が多少劣っていても、入学許可を出しているようです。このようなケースを拡大解釈してしまうと、例えば、スポーツの競技能力だけで大学への入学許可が出されるといった事態も起きかねません。そこで、NCAAでは、学業に関する最低基準が設けられています。このようなことができるのは、SATとACTというテストが、事実上大学入学の際の共通試験となっているからです(図2)。

ここでは、SATを例にとって話を進めていきますが、NCAAデビジョンIに加盟している大学でプレーしたいのであれば、高校時代のコア科目で獲得した学業成績に応じてスライドのような、得点を上げることが求められます。SATというのはScholastic Assessment Testの略称で、カレッジボードという民間の非営利団体が運営しているテストです。

このテストには、言語処理能力を測るCritical Readingと数学、小論文テストであるEssayの3科目からなるSAT Iというテストと、各教科というか、科目別のテストであるSAT IIがあります。この

うち NCAA で要求されているのは SAT I の Critical Reading と数学のスコアのみとなっています。

参考までに述べておくと、Critical Reading、数学ともに平均点は 500 点前後。当然両者の合計点の平均は約 1000 点です。両者の合計が 900 点以下だと、成績は概ね下位 30%、800 点以下だと下位 20%になります。

ちなみに、NCAA のデビジョン II でプレーするには、Critical Reading と Math のスコアの合計で、少なくとも 820 点以上獲得している必要があります。デビジョン II と違って、デビジョン I では NCAA が要求する最低点が儲けられていないので、スライドの表に当てはまる限り入学許可をだすかどうかは各大学に任せられているのですが、事実上 800 点以下の学生が入学するのは難しいようです。

また、高校の段階で、コアカリキュラムと呼ばれる主要科目をしっかりと履修しているのかもチェックされます。

それほど厳しいものではないにせよ、このような基準が定められているため、いかに運動能力が優れていても、大学でプレーするためには、高校時代から最低限の勉強はしておく必要があります。また、コーチが高校生などをリクルートしようとしても、最終的に入学許可を出すのは大学のアドミッションオフィスであり、アスレチック部門のアカデミクスもしくはコンプライアンス担当者からの厳しいチェックも入るので、NCAA のルールを破ることは難しいと言えます。

また、NCAA の基準はあくまで最低の基準なので、大学によってはもっと高い基準を設けている、つまり高校時代の学業成績を相当重視している大学もあります。

かつてスタンフォード大学男子バスケットのコーチがチームを離れる際に、学業に関する基準が厳しすぎると不満を漏らしたことがあるのですが、この辺りの事情を表わしているのだと思います。皮肉なことに、スタンフォード大学のバスケット部はこのコーチが辞めたあと非常に強くなっていったのですが……。

## b. 入学後の基準

いずれにせよ、NCAA のスポーツが、大学の教育プログラムの一環を担っていること、更にはアマチュアリズムを守るという点からも、学生アスリートは、先

### 入学後の学業成績

- ✓ 入学後1年目(新入生/編入者)に対しては、勉強する習慣を身に付けさせる目的で、強制的に自習するための場所や時間を設定している大学が多い。
- ✓ 各セメスターで12時間以上授業に出ないと、フルタイムの学生と認められず、ゲームには出場できない。
- ✓ 各学年で満たすべき取得単位数は原則以下の通り。
  - 1年目…上記授業出席要件
  - 2年目…GPA1.80以上
  - 3年目…卒業単位の40%を終了/GPA1.90以上
  - 4年目…卒業単位の60%を終了/GPA2.00以上
  - 5年目…卒業単位の80%を終了/GPA2.00以上
- ✓ 出場できるのは5年間のうちの4年間。大学院生の上場もOK。

図3

ず第一に学業を本分としていなければならない、言い替えば、フルタイムの学生でなければとされています。具体的に言うと、各セメスターで12時間以上の単位を履修していない者は、フルタイムの学生とは認められないので、ゲームへの出場も許可されません。加えて、コーチ達も、学生が授業に出席しているかどうか厳しくチェックしていて、理由なく授業を休んだ学生に対しては、例えば、朝5時起きで5マイル、これはおよそ8kmですが、5マイル走るというペナルティーや、ズル休みが続いた場合は退部させることもあります。

また、新入生や編入1年目の学生アスリートに対しては、授業以外にもコーチの監視の下で、あるいはチューターの下でといった形で、授業以外の勉強時間を確保することが要求されることが多いようです。先に紹介した大学入学時の最低基準は、それほど厳しいものではないため、現実には自主的に勉強するという習慣を身に付けていない学生もいるので、このような措置が取られているのです。

実は、アメフトや男子バスケットのような人気スポーツでは、成績の悪さや卒業率の悪さが目立ち、NCAA でも度々問題視されてきました。そして2004年には、大学入学後以降、各学年で一定の成績を収めることを義務付けるとの決定が下されたのです。図3にもあるように、例えば大学に入ってから3年目の者は、卒業単位の40%を獲得し、GPAで1.90以上の成績が必要ですし、4年目の者は卒業単位の60%、GPAでは2.00以上の成績が必要です。

入学時に求められるSATのスコアと同じように、これらの基準もあくまでミニマムなものなので、毎年GPA2.00以上の成績を挙げることを要求している大学も多いようです。

因みに、学生アスリートの成績が著しく悪い大学は、奨学金を与えられる人数が減らされることとなります。逆に、学業成績が良い学生アスリートに対しては、競技成績が良い学生と同じように、例えばアカデミック・オールアメリカンなどという形で表彰するという制度があります。

ところで、学生アスリートがアマチュア資格を満たしているかどうかは、アスレチック・デパートメントのコンプライアンス担当者がチェックします。

このコンプライアンス担当者や、アカデミクス担当者は、Associate AD という肩書きを持っていることが多いのですが、入学後の成績も大学当局とアスレチック・デパートメントの共同作業でチェックが続けられます。アマチュア資格や学業成績に関する虚偽報告や不正行為、例えば勉強にできる学生にレポートを書いてもらったなどということがバレると、シーズン最後に行われる全国大会への出場権や、TV 放映権の剥奪等、かなり厳しいペナルティーが科されることとなります。加えて、アスレチック・ディレクターやコーチ、大学当局の人間をはじめとする関係者が、職を失うスキャンダルにも発展しかねません。学生の本分である学業に関する事柄については、相当厳しいルールや罰則規定が設けられているのです。

### ★練習期間と練習時間に関する規定

しかし、いくら学業に関する規定を設けても、学生アスリート達が練習漬けになっていたのでは意味がありません。そこで、NCAA ではスポーツ毎にシーズンを定め、公式戦が開始されるまでの練習期間、あるいは練習回数に制限が設けられています。例えばバスケットボールの場合、例年10月中旬にチームとしての練習が解禁され、11月中旬から公式戦が行えるようになります。それからシーズンが終わるまでの間、チームとしての練習時間は1日4時間以内、週合計20時間以内と決められていて、週1回は必ず休みを入れなければなりません。何だか労働基準法のようなのですが、練習時間に関するルールは全種目共通で、いくつかの例外を除き、原則としてシーズンオフにチームとしての練習をすることもできません。

### ★その他のルール

他にも、種目別にスカラシップを与えられる人数、あるいはスカラシップがカバーできる範囲などが定められており、この範囲を超えて学生に援助を与えることはできません。例えば男子バスケットの奨学金の枠は13人、女子バスケットでは15人となっています。またアメリカンフットボールでは、合計85人。加えて、毎年新しく奨学金を出せる数は25人までという制限もあります。このようなルールを設けることにより、特定の大学だけに優秀な選手が集まったり、学生アスリートが「飼い殺し」にされたりすることがないようになっているのです。

このように、NCAA では大学における競技スポーツが大学経営の一環として存在することを前提にしたうえで、学生アスリートを大学教育のプログラムに乗せていくための、そして競技の公平性を担保するような工夫がされているのです。

## V. アメリカにおける大学スポーツの問題点

とはいつても、NCAA のルールに違反に関する報告は後を絶ちません。違反が起きる理由の1つとして、コーチらの雇用形態が挙げられると思います。つまり、デヴィジョンIに属する大学のコーチは、ほとんどがプロとして雇われていますので、チームの成績がその後の契約年数や、サラリーなどに影響してきます。このため、NCAA ルールを破ってでも優秀なアスリートを確保したいという誘惑に駆られてしまうのです。

そのうえ、NCAA の規定は非常に細かいところにまで及んでいるので、スポーツの専門家であるコーチにとって、全てを把握するのはなかなか難しいということもあります。

また、学業に関するルールがあるにも関わらず、アメリカンフットボールや男子バスケットボール、野球での大学卒業率が低いということも、大きな問題となっています。一般学生や学生アスリート全体の卒業率が約60%であるのに対して、この3種目での卒業率はおおよそ10～20ポイント低くなっています。

経営面から見ても、全てのNCAA スポーツが利益を上げているとは言い難く、アメリカンフットボールと男子バスケットを除くと、NCAA スポーツは明らかに赤字産業となっています。

## VI. 我が国の大学スポーツが抱える問題点

これまでアメリカの大学スポーツ、中でも NCAA のデビジョン I の状況を紹介してきましたが、大学スポーツにおける日本とアメリカの違いを比べてみると、日本の大学スポーツが抱える問題点がはっきりしてくるのではないのでしょうか。

### a. 統括団体の必要性

日本の大学スポーツが抱える問題点として先ず挙げなければならない点は、競技種目を横断的に統括する団体が存在しないことです。その結果、学生とは何か、ひいては学生スポーツとは何かといった本質的な議論がなされないまま、各競技団体が出場資格を決めるといった状況になっています。

そもそもある選手が「学生」なのかどうかを決めるのは、大学当局であり、大学体育会の OB をはじめとするスポーツ関係者ではありません。この点に関して大学側が明確なライン引きをしておけば、スポーツの強化だけを目的として留学生を入学させたり、社会人と学生として二足の草鞋を履いている学生の取り扱いをどうするのかといった問題は、そもそも起こらないのです。これまで運動部の運営は OB のボランティア活動に依存してきたという経緯があるにしても、この点に関しては、大学側も積極的に関与すべきではないのでしょうか？

次に、奨学金をはじめとする金銭の授受や、リクルートに関して、一定のルールが定められていないことも問題点として挙げられると思います。特定の業者と結びついたチームが、業者のネットワークや資金力を利用して全国、あるいは海外から選手を集めているようなケースもあります。プロ野球界からの栄養費問題ではありませんが、少なくとも不明朗な金の流れだけは断たれるべきだと思います。

### b. 学生アスリートに対するサポートの欠如

ところで、日本とアメリカの比較を通じて、今回最も強調したいのは、学業面に関する規定や、サポートに関する違いです。高校や大学を問わず、はじめから学業を全く無視し、まるでプロアスリートのようにスポーツだけに没頭している学生は少なからず存在しています。これは古くて新しい問題ともいえます。例えば、関東学生

ゴルフ連盟では、大学で学業を修める意志がないプレイヤーを排除するため、毎年 16 単位以上獲得できなかった場合は競技会への出場を認めない旨の規定を盛り込んでいます。その背景には、1 年生のまま進級することなく大会に出続け、最終的に大学を卒業することなく去っていった選手の存在があったとのことでした。

実は、今から遡ること 80 年前の 1930 年 12 月、慶應の体育会では不当なもてなしを受けたり、落第した者は退部処分にするとの決議を行っています。大学進学率など現在とは全く異なる社会情勢下のこととはいえ、現在にも通ずる内容ではないかと思います。

大学とは何かを考えた場合、大学生にとっての大学とは先ず第 1 に学問を修める場所なのであり、大学の教員は学生に対して知の伝達を行う義務を負っています。その一方で、AO 入試という名の無試験入試が全国的に広まり、少子化が進む中、多くの大学が学生を青田買いする手段としてこの選抜方式を利用している状況では、スポーツでのキャリアを積む手段として大学に進学してくる者や、このような学生を利用しようとする輩が出てくるのを、完全に排除することは不可能だと思われます。

見方によっては、スポーツは本来楽しむべきものであり、学業との両立云々ということを議論すること自体がおかしいという考え方もできます。また、スポーツの価値はスポーツ自体に見出されるべきで、例えば「どここの部」が優勝したら、それが大学の榮譽になるというのはおかしいという意見もあります。仮に、このような意見が正しいとすれば、そもそも学校制度の下で部活動が存在していることが間違っているという結論になります。つまり、学校という場所に、スポーツチームは存在すべきではないということになります。しかし、現実問題として考えると、我が国では学校制度の下でスポーツが展開されてきた歴史があり、この状況を一朝一夕に変えられるとは思えません。

それに、いかに優秀なアスリートでも、第一線で活躍できる期間が限られていることや、大学卒業後、スポーツ選手として生計を立てられるのは一握りに過ぎないということを考え合わせれば、大学という教育機関の中に身を置いて、学習の機会を得ることは無駄ではないでしょう。

何れにせよ、AO 入試やフィット入試、自己推薦入試などいろいろな呼び方がありますが、このような入試を

通じて、大学でもスポーツを続けたいとの意思を明確にしている学生を受け入れるのであれば、入学後のサポート体制についても考える必要が有るのではないのでしょうか。これらの入試制度の本質が何なのかは議論のあるところですが、大学側としては、入学後学生が能力を十分発揮してくれる、あるいは大学と学生の相性がマッチしているかどうかなどを判断して、合格不合格の判断をしている筈です。であるなら、大学で競技スポーツを行いたいと言っている学生を受け入れた以上、競技生活に対してもある程度はサポートされるべきであろうし、競技生活をサポートする体育会と、学生に入学許可を出した各学部の間で、教育方針に関して意思の疎通を十分に図っておく必要があるのではないのでしょうか。学生を受け入れたのはいいが、「その後の活動はどうぞ自由に」というのでは、教育機関としてあまりにも無責任のような気がしてなりません。

そこで、体育研究所としても、競技スポーツで一旗挙げたいと考えている学生に対して何ができるのかを考えてみる必要があります。体育研究所の所員はおよそ20名前後で推移しています。体育研究所の所員の専門領域は、競技種目は別として、運動生理学やトレーニング論、心理学や政策学など、様々な分野に亘ります。したがって、競技能力を上げるための基礎知識を

伝えることもできますし、そもそもスポーツとは何なのかを一緒に考えていくこともできると思います。実際、体育研究所開設科目である体育学講義や体育学演習を熱心に受講している体育会の学生の姿を毎年見ることができます。

慶應の体育会部員の数は、大体1,500人くらいでしょうか。学部学生数が約29,000人ですから、体育会部員の割合は、全体の5%強でしかありません。体育研究所としては、体育会部員だけでなく、一般の学生にも、スポーツの効用や素晴らしさを伝えていきたいと考えています。そのためには、体育とは何か、体育の授業はどうあるべきかを考える必要があります。この点については村山先生が取り上げます。

ところで、地域社会に対して大学は何ができるのかということ考えた時、スポーツを通じた地域の人達との交流は、非常に有効な手段になると思われます。実際、地域に根ざした大学作りをするために、スポーツを活用することを謳っている大学もあります。では、どのような形で交流を進めていくのか、この点に関しては、このあと、須田先生からお話があると思いますので。私の発表はこのへんで終わりにさせていただきます。有り難うございました。



# スポーツにおける大学と地域の連携

——大学発の総合型スポーツクラブの提案——

慶應義塾大学体育研究所准教授 須田芳正

## I. はじめに

東日本大震災という未曾有の危機は、生活における地域コミュニティの重要性を改めて認識する機会となりました。私も東北には多くの友人、知人がおりますが、特に被害の大きかった東北の方々が協力して危機に立ち向かう姿は、日本人がどのようにあったか、またはあるべきかを考える契機となりました。都市化により地域内の結びつきが弱まる中で、世代や職業等の垣根を越え、多くの人が集まり、楽しむことができるスポーツは、コミュニティを生み、「絆」を育てる1つの原動力となると考えます。そのスポーツの普及のために日本のスポーツ政策は、西欧のスポーツクラブを範とした総合型スポーツクラブの発展を模索していますが、私は、人的、物理的、知的なリソースの集積地である大学こそが、日本のスポーツを真に地域に根ざし、人々のコミュニティを生み出すために貢献すべきだと考えています。

本日、この体育研究所設立50年の機会にお時間をいただき、体育研究所が取り組む地域との連携の一端をご紹介しますとともに、大学の体育施設を地域に積極的に解放し、教員及び学生が、スポーツを通して、地域の現実に目を向け、地域の方々との半学半教を行う新たな教育の場である大学発の地域スポーツクラブを提案させていただきたいと思っております。

## II. 横浜FCとの提携

慶應義塾体育研究所では2006年より、横浜に本拠地を置くプロサッカークラブである横浜FCと提携し、「産学協同スポーツプロジェクトマネジメント」と銘打った研究を進めています。

この活動はスポーツを通して大学と地域スポーツクラブ、企業、そして地域住民相互の有益な関わり方を研究することで、慶應義塾21世紀ランドデザインにある「感動の湧き出る教育を実践し、新しい知的価値の創造と蓄積に精励し、新たな実業の世界を切り拓くこと」という慶應義塾の目的を追究するものです。本提携では、

- ① 各種スポーツ大会及び教室の実施、講習会およびセミナーの実施、地域に根ざしたファンの獲得活動等、地域社会における健康増進、スポーツ振興を目的とした各種スポーツイベントの共同開催
- ② インターンシップの実施、講義の共同開催等、塾生のスポーツ社会教育の充実
- ③ 競技力向上を目的とした人材交流
- ④ 地域における経済性の発見と活性化に関する取り組みを行っています。

本提携にあたっては、2006年8月7日(月)に日吉キャンパス来往舎内シンポジウムスペースにて記者会見が行われました。会見では横浜FCより奥寺康彦社長(当時、現在会長)、太田博喜営業部長(当時、現在常務取締役副社長)、当研究所より植田史生所長、石手靖プロジェクトリーダーから提携の内容を説明しました。多くの報道関係者にお集まりいただき、様々なメディアで取り上げていただきました。今や、多くのJリーグクラブが大学と提携し同様な活動を行っているところもありますが、我々はその先駆けであったと自負しています。

それでは、様々な活動の中で、もっとも地域との結びつきが深い活動である、地域の子供達に向けた「YOKOHAMA FC-KEIO サッカースクール」(以下サッカースクール)の活動をご紹介します(図1)。



図1



図2

本サッカースクールは2007年4月9日のスクール初回から数え、本年で5年目を迎えました。毎週月曜日、年計39回(主に8月および祝祭日を除く)、15時40分から20時までの間に、幼稚園年中から中学生までの約280人の子供達がサッカーを楽しむ、日本での有数規模のスクールに成長しています。

このスクールの目的は、健康増進、人格形成、社会教育の実践であり、地域社会に浸透したスポーツの振興、そして地域の方々のスポーツへの意識及び健康、体力に関する調査研究が目的です。しかし、それ以上に、このような活動を通して、多くの方々が毎週月曜日、下田グラウンドに集い、サッカーを通して交流する場があることで、サッカースクールを中心とした大きなコミュニティが形成されていることに大きな意義があると思います。

のべ17クラスのメインコーチは横浜FCより派遣され、そのアシスタントコーチを慶應義塾の学生が務めています。クラスには子供達だけでなく、その子供達を応援する多くの保護者の方々が、大きな期待を抱いて観戦しています。メインコーチと常にコミュニケーションをとり、円滑にトレーニングを進めながら、万が一怪我をした子供がいた場合は適切な対処を行い、保護者の方ともお話をする必要があります。

子供達にとっても、保護者の方々にとっても学生としてではなく、サッカースクールのコーチとして見られているので、アシスタントコーチの行動には当然ではありますが大きな責任を伴います。

あるときは子供達のヒーローとして、質の高いデモンストレーションを行い、あるときは一社会人と同じように、保護者の方々とコミュニケーションを図る。

こういった関わりは、学生にとっては、貴重な社会経験の場であり、半学半教の実践の場となっています。

また積極的な情報発信も行っています。これまでの活動を通じて、スクールに通っている子供達のご家庭では、サッカーを楽しむ、技術を磨き、心身を鍛えるとともに、子供達に生活習慣を整え、かつ何事にも真摯に取り組む文武両道の気風を身に付けさせたいというご期待があることが分かってきました。

「先ず獣身を成して、而して後に人心を成す」という創始者の福澤諭吉先生のお言葉にあるように、文武両道は、慶應義塾がこれまでの歴史の中で築いてきた気風であり、アシスタントコーチとして活躍する学生も、文武両道をやり遂げています。そこで、子供達やご家族に、学生達がこれまでどのように文武両道に取り組んできたのかを伝え、子供達のロールモデルになれるよう、「半学半教」という広報誌(図2)を作成し、学生がスクールに通う子供達の年代のときには、文武両道を実践するためにどのような取り組みをしていたかを紹介する試みを行っています。

この活動を通して、子供達、保護者の方々との新たなコミュニケーションの手段が増えるとともに、紹介された学生も、多くの方に自分の経験を紹介することで、アシスタントコーチとしての責任感が生まれ、スクールに対しての意識が高まるという副次的な効果もありました。

今後も、慶應義塾がこれまでの歴史の中で培ってきた文武両道のメソッドをスクールという場を通して発信できるよう、取組みを継続していきたいと考えています。

ここで、現在私が監督を務める体育会サッカー部と連携した地域貢献活動についてもご紹介したいと思います。

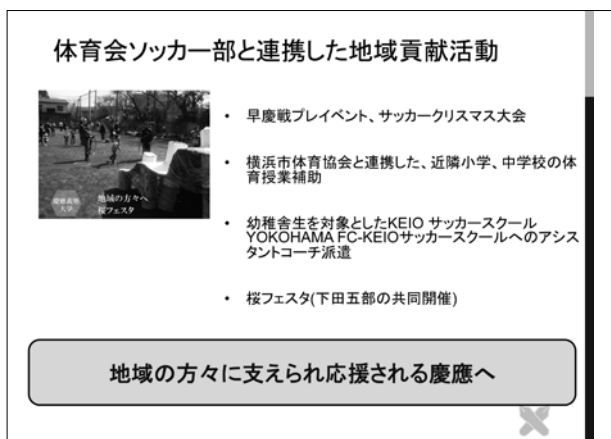


図3

### Ⅲ. サッカーを通じた社会貢献活動

慶應義塾体育研究所がある横浜市港北区は古くから少年サッカーが盛んであり、地域に根ざした多くの少年サッカーチームが存在します。しかし、その少年サッカーチームの多くは、近隣の小学校や中学校等、公共のグラウンドを分け合っており、グラウンドの確保に苦勞しているという声を伺っています。また指導者の方々もボランティアで指導されていることがほとんどで、少ない人手の中でやりくりされている苦勞があります。慶應義塾体育会サッカー部で活躍する学生の中には、地域で育った選手も多く、地域の方々に応援される活動を行うために、学生自身が知恵を絞り、様々な活動を行っています(図3)。

例えば、毎年6月に、早慶戦のイベントとして、地域の少年サッカーチームを招待したミニ大会、また12月には、サッカークリスマスと称し、子供達へのプレゼントとして、サッカークリスマス大会を開催します。こういった活動には港北区サッカー協会の方々のご尽力もあり、毎年十数チームが参加いただき、のべ200名ほどの子供達の白熱した試合が展開されています。港北区区内でも、多くのチームが一同に会して試合をするような場はあまりなく、チーム関係者、保護者の方々からもご好評をいただいています。学生たちが自主運営を行い、子供達が集中して楽しんでもらうように様々な趣向を凝らし、実践する貴重な社会貢献活動として、今後も継続して参りたいと考えています。

さて、私はこれまでサッカーに関する活動をご紹介してきましたが、本来スポーツは、子どもから高齢者まで、様々なスポーツを愛好する人が、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて

楽しむ環境があるのが理想です。

そのような環境を作るために、どうしたらよいか、それが地域と体育研究所の連携を考えるためには必要不可欠だと思います。

日本のスポーツは、学校体育及び部活動及び企業スポーツから発展してきた歴史があり、競技志向や、各競技縦割りの傾向が強かったため、1995年から実施された文部科学省の「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」や、地域密着を掲げるJリーグ百年構想の影響により、欧州型の総合型スポーツクラブの発展が模索されてきているのです。

私は2008年より、オランダのプロスポーツ指導者育成学校であるCIOS (Centraal Instituut Opleiding Sportleider)にて2年間の研修を受講し、ヨーロッパのフットボールの指導者資格であるUEFA-Bライセンスを取得しました。オランダでの2年間の生活の中では、居住した地域に根ざした伝統あるスポーツクラブであるFC Bloemendaalに所属し、欧州の典型的なスポーツクラブでの交流を体感して参りました(図4)。そこ

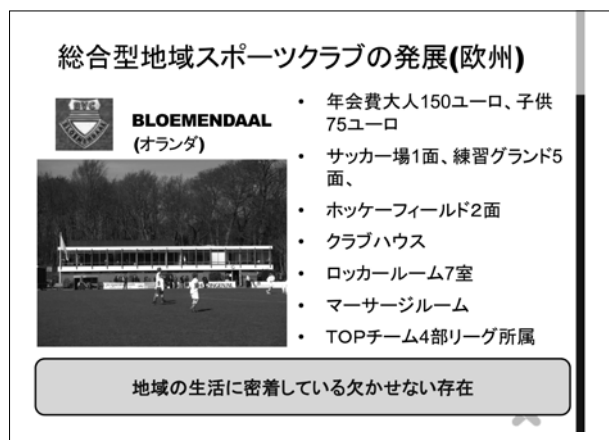


図4



図5



図6

では、クラブが使えるフットボールピッチが何面もあり、専用のクラブハウスも備えています。

図5は、私が指導したFC Bloemendaal U14のチームですが、毎週土曜日に開催されるリーグ戦を中心に、年代別、競技レベル別の多くのチームがあり、補欠がなく、皆がスポーツを楽しむことができます。

試合が終わった後には、クラブハウスにあるバーに皆が集まり、飲食と会話を楽します(図6)。

そこでは職業や世代を超えて、サッカー談義に花を咲かせながら、近況を報告したり、悩みを相談したりといった確かな絆やコミュニティがありました。それまで、日本の競技志向中心のスポーツに染まっていた私は、スポーツを楽しむことの本質を思い知らされると共に、果たして日本で同じような空間を作ることができるだろうかと考えてきました。

まず、土地開発の進んだ現在の日本で、新たに地域のスポーツクラブのために専用のピッチを用意し、クラブハウスを建設するという事は困難です。また、スポーツを楽しむという文化も日本にはまだ根付いておらず、体育や部活動から派生したスポーツは自己の鍛錬の手段であるというスポーツが持つ一側面が、大きな影響力を持っており、楽しむということに対する違和感を感じる文化的な背景も根強くあります。

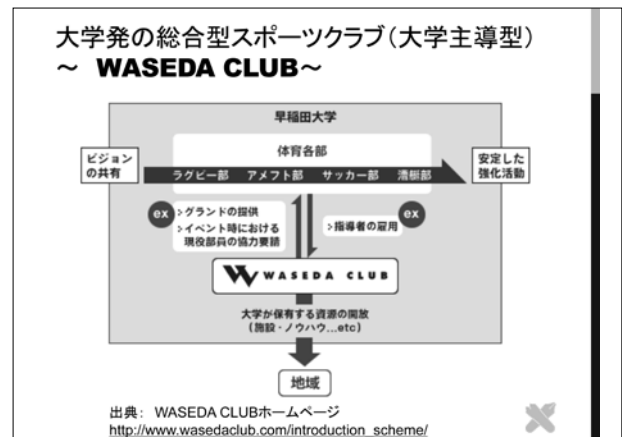
#### IV. 大学発の総合型スポーツクラブを

私達は、日本のスポーツのこれまでの発展の過程を考え、日本、そして地域の実情にあった総合型スポーツクラブのあり方を模索する必要があると考えています。

これまでの体育研究所での活動を通して、人的、物理的、知的なリソースの集積地である大学が、スポーツを通して、地域コミュニティの中核をなすことで、地域に果たす役割が大きいことには確信をもっています。私は、大学の体育施設を地域に積極的に解放し、教員及び学生が、スポーツを通して、地域の現実に目を向け、地域の方々と半学半教を行う新たな教育の場である大学発の地域スポーツクラブを創造したいと考えています。では、大学発の地域スポーツクラブとはどのようにあるべきなのでしょう。

大学発の総合型スポーツクラブは、多くの大学で既に実施されており、既に多くの会員を有しているクラブもあります。早稲田大学が中心となって設立されたWASEDA CLUBはその大きな成功事例です。図7は、WASEDA CLUBのホームページから引用させていただいた図ですが、教員養成課程や、スポーツ科学、スポーツマネジメント分野の学部がある大学では、そのクラブの施設、マネジメント人員、指導者やノウハウを大学が、または大学が母体となったクラブが主導することに大きなメリットがあります。また地域の方々にとっても全てがパッケージで提供されているクラブに参加しやすいというメリットがあり、多くの会員を集めているのは必然であると考えます。

当初、私も同じような大学主導型のクラブを模索していました。しかし、地域社会の発達したオランダでの経験や、体育研究所の様々な活動を通して地域の方々と接する中で、本来地域の方々が主体的に運営、参加すべきクラブの機能を大学側がもってしまっただろうかと考えるようになりました。全てがそろった大学主導型のクラブは、地域にあった、また地域に生



出典: WASEDA CLUBホームページ  
[http://www.wasedaclub.com/introduction\\_scheme/](http://www.wasedaclub.com/introduction_scheme/)

図7

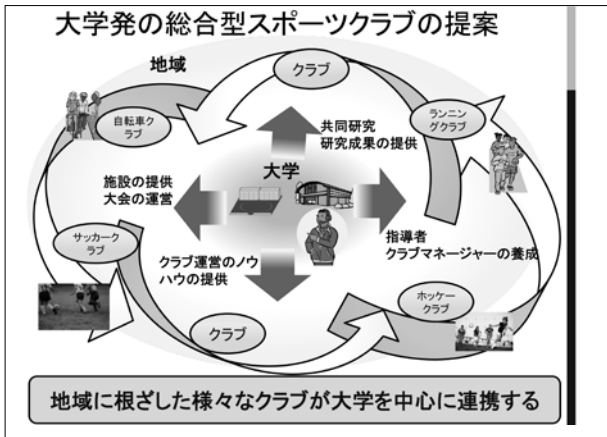


図8

まれつつあったクラブと競合関係となり、地域のクラブの発展を阻害する存在となる可能性も否定できません。福澤先生から受け継ぐ独立自尊の精神を地域の方々と共有しながら、地域社会の発展に貢献していくためにはどうしたらよいのでしょうか。

そのような模索の中で、私が考える大学発の総合型スポーツクラブは、地域が主導であり、地域の方々が主体的に運営、参加するクラブの集合体です。施設の提供、クラブマネジメント人員や指導者の養成といったノウハウは大学側が提供します。

しかし、実際の運営は既にある地域のスポーツクラブや、新たにできるクラブが中心です。そして、大学がハブ（HUB）となって、それぞれのクラブが大学を通して連携できるような仕組みを作ります（図8）。地域の方々が主体的に参加することが、真に地域社会の発展に貢献し、地域に根ざしたスポーツクラブを推進する力になると考えるのです。

この地域主導の総合型スポーツクラブを目指す取り組みはまだ始まったばかりですが、多くの方々と議論を重ねながら、あり方を研究していきたいと考えています。本日はご清聴ありがとうございました。

## 大学体育教員の使命

—— カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとともに ——

慶應義塾大学体育研究所准教授 村山光義

### はじめに

2010年8月のスポーツ立国戦略（文部科学省）発表に続き、2011年6月、スポーツ基本法がスポーツ振興法を50年ぶりに改正する形で成立しました。また、2011年7月、日本体育協会とJOCの創立100周年記念シンポジウムでは「スポーツ宣言日本～21世紀におけるスポーツの使命」が採択され、その達成は東日本大震災の復興支援にも繋げられています。このように、スポーツが世界共通の文化として社会的役割を演じる時代が来たということが出来ます。

一方、我が国が体育研究所も設立50年を迎え、体育・スポーツの研究・教育・普及振興に一層努力する必要があります。しかし、大学体育の現場は社会の“スポーツ事情”と同じ流れを進めばよいのでしょうか？確かに、我々体育研究所も、全国の多くの大学体育の教員・関係者も、体育の重要な要素としてスポーツを扱っていることは間違いのないことです。また、スポーツ基本法が理念とする、スポーツが青少年の育成、社会の活性化、国際交流等に貢献するものであることは、体育の教育目標とも大きくかけ離れるものではありません。ただし、体育とスポーツの違いを論ずるまでもなく、体育はスポーツを教材として「人間」を育てようとしてきたのです。つまり、必ずしもスポーツを高める活動をすればよいのではないと考えられます。こうした状況をふまえ、今後、我々体育教員は何を使命として大学に貢献できるのでしょうか？そこにスポーツはどのように関わって来るのでしょうか？

### 「スポーツ」の価値は高まるのか？

スポーツは社会的役割を担う文化として注目されていますが、国民の多くはスポーツが権利であり、国がその枠組みを保障する、それだけの価値があるものと認識しているのでしょうか？また、国民のスポーツへの関心は幅広いものでしょうか？テレビやメディアに露出するものに熱狂することのみが、スポーツの価値を高く認めるものでしょうか？女子サッカー「なでしこ JAPAN」は国民を元気づけました。確かにワールドカップ優勝、オリンピック出場の躍進は大変すばらしいことです。しかし、多くの国民は、たまたまテレビで話題になったからそれを知り、また手放しでそれを受け入れています。国民はアマチュアスポーツの置かれている現状をよく知っているのでしょうか？テレビに映らないアスリートの、世界への挑戦を国民的関心として受け入れられるのでしょうか？スポーツの意味や価値はどのように理解されるのでしょうか。

### ★スポーツの本質

さらに、国民は見るスポーツと自分が行うスポーツとの関係をどう感じ取っているのでしょうか？スポーツという文化は多様です。子供のころ学校でやっていたスポーツ種目を一生続けることはなかなか難しいものがあります。しかし、文化として生活の中には多くのスポーツ活動が存在しています。フィットネスクラブでトレーニングをする。週数回スイミングを行う。趣味のように高性能自転車を持ってサイクリングをする人、流行のファッションを身にまとい山登りをする山ガールやトレイルランナー。公園のゲートボールにも定期的な練習会が存在します。私は、これらの多様なスポーツ活動はその人ごとのライフスタイルを決め

る重要な要素であり、実践していること自体に高い価値を感じますし、それこそがスポーツという現象であると考えています。しかし、多くの国民は「スポーツとは？」と聞かれると、そうした諸活動をちょっと行っているが、メディアに出る競技スポーツこそがスポーツであり、自分の日常がそれに負けないほど価値のあるものと感じていないのではないのでしょうか？

### ★大学体育の重要性

つまり、スポーツ立国するために、スポーツの価値を啓蒙する必要があるのです。トップアスリート強化に地域スポーツクラブとの連携・ピラミッドの構築を目指しても、単に経済的効果による国の活性化を頂点とする政策となってしまいます。トップアスリートのみが強化され世界的な成績を残しても、スポーツを深く理解した国民は増えないのではないのでしょうか？

国民の日常的活動によって国が元気になり、活力ある社会が想像される必要があります。そのために、教育機関が社会と連携を取ってその下支えをすることが今重要であると考えます。この点について、大学体育が貢献すべき役割が見出せるはずです。

## 大学体育を振り返る

### ★教員は何を教えるのか？

しかし、大学体育も単にスポーツを実践する場としてしか捉えられていないのではないのでしょうか？ 学生は好きなスポーツ種目をしていればいいと考えています。教員にも単なる種目指導のスペシャリストという意識しかありません。この意見は的外れでしょうか？

大学体育の教育的意義の議論はスポーツ種目の競技的指導面に隠され埋没してはいないのでしょうか？ もっと、「教員」としての使命について議論すべきではないのでしょうか？

また、大衆スポーツの発展を見守る中で、スポーツの本質を語るものがなくなってしまっていないのでしょうか？ 多様化するスポーツ文化はこの間、プロ・アマの垣根を越えて情報文化としての膨張を続けてきました。しかし、スポーツに関わる専門家集団がその奥深さを啓蒙する必要がないのでしょうか？

高度経済成長期からバブル時代にかけて、社会の好循環に大学体育や大学スポーツは貢献できたのかもしれませんが、しかし、その基本的な意義や価値を十分に議論してこなかったと考えられます。期せずしてバブルの終焉とともに、大綱化によって大学体育は選択化され、新たなステージにどう立つのか、その議論において、「体育」は「スポーツ」へと名称を変えましたが、両者の意味に関する本質的議論は残されたままと考えます。今再び、大学体育とスポーツの関係を考える時でしょう。

### ★体育とスポーツ

スポーツはもともと遊びや気晴らしを意味するものでしたが、競技性が特化され、競技種目を基盤に発展しています。しかし、生活の中の文化という側面も強く、やはり気晴らしであったり社会の中で人をつなぐためのツールでもあります。この意味でスポーツは文化的現象です。一方、体育は身体を育む教育機会であり、健康の維持増進や社会の文化を継承することを教えることが目的です。スポーツは人を育てるための教材であり、スポーツ種目を教える学んでいくわけではありません。スポーツが人生や社会にとって大切であることを教える必要はあります。しかし、それは1つのスポーツ種目を極めることで身につくのではなく、スポーツという身体運動文化に共通した要素から学ぶことなのです。例えば、技や体力を向上するために創意工夫してトレーニングを考え、さらにそれを繰り返し行うという取り組み、努力することの大切さを、身をもって体験するのです。TVに映るトップアスリートがどんな努力をしてベストパフォーマンスを發揮しているのか、人間の持つ真面目さやひたむきさを知ることが重要です。また、スポーツでも遊びでも競争という要素があり、時にその能力差は残酷なまでに序列を生みます。しかし、勝者を支えているのは敗者であり、また、競技を終えればまさにノーサイドであり、同じ人間として仲間なのです。スポーツの持つ能力の凌ぎ合いは遊びにもあり、人間性を高めるものですが同時にそれを認め合うものなのです。ですから仲間が生まれるのです。「負けること、できないことが嫌だからスポーツは嫌いだ」と言う人にも、できないことを体験し、そこから自分を高めていく、未来を切り開いていくスタート地点を与える必要があります。現代の情報化社会は体験す

前にできる・できないを判断する傾向を強めています。今の若者の口癖でしょうか、「無理」「ありえない」などの言葉は日常生活に溢れています。嫌なことからはすぐに逃げてしまう。苦手なのではなく、やりもしないで決めてしまう。ましてや、自信のないことにはなかなか飛び込んでいかないので、仲間の輪も広げられません。そうした、体験しながら自分を変容させるという姿勢を体育でこそ育てなくてはなりません。この様に、1つのスポーツ種目を単に極めさせることが体育の目標ではありません。スポーツ種目の専門家に育つ場はすくなくとも大学体育の場ではありません。したがって、幅広いスポーツに共通した教育要素を用いた学びの場が体育なのです。

またこうした教員の立場にある我々がスポーツを語り、スポーツを実践したり支えたりすることが国民の成長に好循環を生むという意味を知ってもらう必要があるのです。

## 2011年の大学と大学体育

### ★現在の大学の課題

大綱化から20年を経ようとする現在、大学を取り巻く環境も変化しました。大学全入時代と言われる中、就職の厳しさは激しさを増し、大学の質保証が言われるようになりました。新たな知の創造による教養教育や社会人育成などの課題が付きつけられています。では、我々は大学体育教員として今何に取り組むべきなのでしょうか？

その一指針として、大学としてのディプロマポリシー

(学位授与方針)にリンクした形でカリキュラムポリシーを考える必要があるでしょう。まず、大学を卒業する上で、どのような人材を作るのか？ 無論体育科目のみがそれに直結するわけではありません。したがって、カリキュラム編成の中にどう位置づけられるのか、他の科目との比較・連携によって、その特徴を示していく必要があります。ここで、保健体育科目のディプロマポリシーを以下のようにまとめてみました(図1)。

体育の教育は今こそ人間教育としての普遍性を再確認し、心身ともに活力に溢れ、他者との交流を深める行動力を持った人材育成に貢献することを目指すべきである。さらに大学における体育は、単にスポーツ種目を楽しむ姿勢をこえた学びの姿勢を導く必要がある。体育はスポーツや身体活動を教材として利用して、他者とともによりよく生きることを学ぶ実体験型の教育機会であり、その理論は人間を理解しようとする幅の広いもののはずである。特に大学体育は、そのことを礎として、他者とともに社会的責任を果たすことができるよう自己を改革する場となるべきである。

### ★必修化の模索

先述のように、こうした人間形成に関するカリキュラムは大学全体の総合的なものですが、体育の持つ「場」や「機会」は大変特徴的です。その意味では、保健体育科目が再び必修科目としての役割を担うことが必要でしょう(図2)。その必修の意味には、まさにどのような教育理念を持ったプログラムとなっているかが重要であ

**学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー策定)**

○大学は、卒業における学位授与の方針を具体化・明確化し公開する

**【学士力に関する主な内容】(国の参考指針)**

1. 知識・理解(文化、社会、自然 等)
2. 実用的技能(コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力 等)
3. 態度・志向性(自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任 等)
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

文科省高等教育局大学振興課長 藤原氏より H22.9

**学士力に心身の健康を位置づけるべき**

**活気と親しみあふれるキャンパスと社会を構築するために、大学における保健体育の教育効果を再認識すべき**

学士課程教育に関する共同声明・体育系学術団体からの提言2010  
(全国大学体育連合・日本体育学会・日本女子体育連盟・日本体力医学会・全国体育系大学学長学部長会・日本教育大学協会保健体育保健研究部門)

図1

**教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー策定)**

- 大学は、順次性のある体系的な教育課程を編成
- 国は分野別のコア・カリキュラム作成を支援
- 大学は、学生の学習時間の実態を把握し、単位制度を実質化
- 大学は、成績評価基準を策定し、GPA等の客観的な基準を適用

**大学体育教育に関する期待**

- 保健体育科目がどのような意義と効果を持つのかを、教育課程の中で適切に位置づけることが必要ではないか。
- 大学全体、専門教育等との密接な連携が必要。

文科省高等教育局大学振興課長 藤原氏より H22.9

**再び体育科目を必修科目に位置づけ、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに明確な貢献をすべき**

図2



り、その形式・形態には多様なものが考えられます。特に大学の附置研究所である我々は、各学部のカリキュラム上に有効に機能すべきで、学際的取組などその枠組みを幅広く捉えていくべきでしょう。また、全学的規模から考えれば、正課カリキュラムに留まらず、課外活動にもその場を求める必要があるかもしれません。

毎年、合宿型の授業を担当していますが、近年、学生の生活の実態を見るにつれ感じるがあります。「生活力の弱さ」です。ネット・携帯社会は情報中心のバーチャルな日常と言われます。そうした中で、困ったことはすぐにネットで情報を得て解決します。現代は実に多くのサービスがネット上から簡単に手に入ります。しかしながら、大学において新たな友人がうまく作れない、新たな活動を始められない等の悩みを持っている学生が多いのです。日常生活の中の実体験から学ぶことが出来ていないのです。したがって、共同生活をして寝食を共にすると様々な「弱さ」を露呈することになります。食事を作ることは高度な身体活動であると思われませんが、食事に関する取り組み1つとっても、その学生の生活を垣間見ることができます。知識や手法を持っていないことも多いです。掃除の仕方でも同様です。いつも便利に自分のペースで生活しているので、社会性を持った行動が苦手となります。すなわち生活力が弱く協調性もないのです。しかし、こうした状況に出会い、最も危惧しているのは、その学生達ではなく、その他大勢の体育科目と縁のない学生のことです。合宿種目やスポーツの実践を実体験しに来ている学生は、まさにそのトレーニングができています。「昔はそこまで教えなくても大人扱ってきた」と嘆きながらも、現在は体育科目がそうした生活体験、社会体験の場としての役割も担うことになった、と考えるべきでしょう。しかし、こうした場に出会えず、もっと言えば近づかないようにして、社会に出て行く学生にアプローチする必要があるでしょう。まさに、大学としてのディプロマポリシーに関わる話です。

### ★体育向上・改善への対策

以上に対して、課題とすべきことは、我々教員側の具体的な取り組みについてです。これまで、研究所においてカリキュラムや研究所の諸活動について議論は行われてきました。近年では平成16年に新カリキュラム

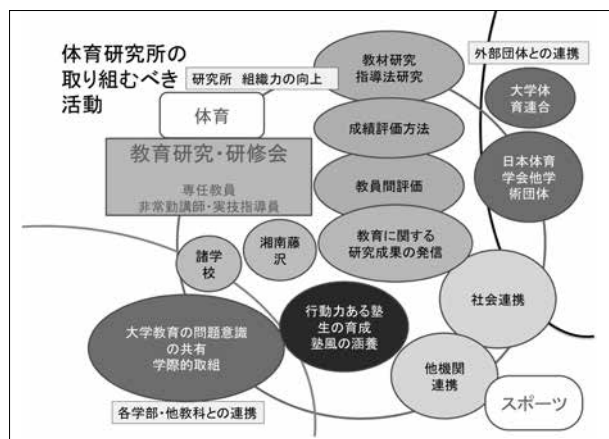


図3

を策定し、教育目的別評価方法の明確化などを開始しました。また、義塾150年に向けて教育目標を設定し、「行動力ある塾生の育成」「塾風の涵養」などを正課・課外を問わず取り組むことも掲げてきました。しかしながら、先にも述べたように、目指すべき教育理念について、各自の授業の中でどのように取り組めるのか、十分に議論が深まっていないのではないかと考えます。実施する種目は違って、学生の成長を考えた際に、共通に解決して課題は何か？ そのための手段・工夫についてもっと話し合う場が必要でしょう。また、FDとして、授業の運営面や安全管理も含めた統一的体制作りが必要でしょう。この点については、多くの非常勤講師や実技指導員とともに強い組織作りが欠かせません。そのためには、研究所主導の教育研修会・研究会を定期的開催することが望ましいです。そして、研究所内に強いリーダーシップが生まれることが望まれます(図3)。

### ★体育の今日的価値・効果

研究面からの基盤強化も重要で、教育の実践研究をもっと推進し、文字通り「大学体育」を研究して教育成果を上げる必要があるでしょう。実際、スポーツ立国戦略においては、体育・スポーツ研究者に「エビデンスの蓄積と検証」「社会への還元」などが期待されています。それを基礎に、社会のリーダーを育てる責務こそ、専門家集団として研究所所員が果たすべき役割となるでしょう。

最後に、昨年より所内の将来構想委員会において、教育問題に取り組み始めたことに触れておきたいと思

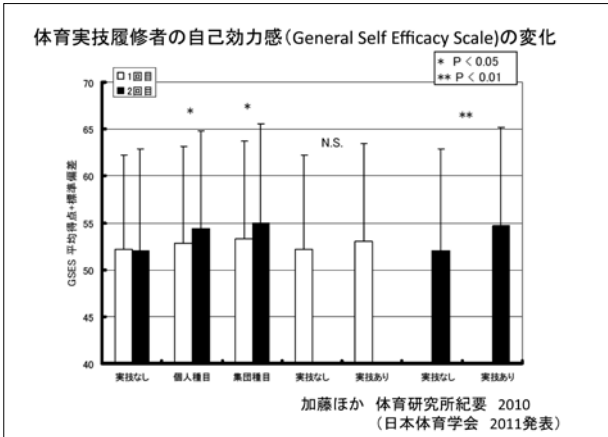


図4

います。近年の学生の生活力の弱さに対し、対人性のある実践科目として体育が貢献できるだろうという思いから、その検証を試みています。自己効力感や社会的スキル能力の向上に対し体育実技の効果が期待できる結果を得ました(図4)。一般的に、体育がコミュニケーション能力の獲得に役立つと言われますが、どんな教育プログラムがそれを促進するのか? 単に体育=スポーツをやらせておけば、そうした面に有効であると胡坐をかいてきたのでしょうか? 教員としてどんな仕掛け・作用を用意して学生と対峙するのか? 試行錯誤の経験則に科学的視点を持って日々努力することが、今必要です。教育プログラムに関するより高度な議論を活性化させるべきでしょう。そのために、国の政策はもとより、他大学の動向、各種学会や大学体育連合、スポーツ関係団体の動向や情報も常に収集し、変革の道を進んで行きたいと考えます。

## ディスカッション

**司会：**以上、3人の先生から、それぞれの専門分野やご経験を中心にいくつかご提言をいただきました。それでは、これからディスカッションの時間に入りたいと思いますが、まず最初に指定発言者として長谷山常任理事からこの3名の発表を聞いたご感想をうかがい、それを元にフロアの皆さんとディスカッションを重ねていきたいと思っています。それではよろしくお願いします。

**長谷山：**長谷山です。どうぞよろしくお願ひいたします。加藤先生、須田先生、村山先生、3先生のお話を大変興味深くうかがいました。

まず加藤先生は、スポーツ能力に優れた競技選手が大学に入ってきた場合に、学生であることの本分をどのように担保していくのか、そのために大学側としてどうサポートしていくかについて、学業の基準、練習の基準点、それから留学、卒業、進路、あるいはサポート体制をどうするかということに焦点を当ててお話を進めていただきました。

実は、私もゼミを持っておりますが、自分のゼミの学生が体育会に所属している学生かどうかはすぐには分からないことが多いです。何かの拍子に分かりますけれども、そうでないと学業の評価等の基準で、特に体育会所属とそうでない学生は区別しておりません。むしろ体育研究所の歴史をさかのぼりますと、体育科目の教員が学部にも所属していたときには、学位授与の基準、学業の評価ということについて学部教員として発言する機会があったわけですが、現在は体育研究所として独立した組織になっています。それは大変よいことで、競技技術の向上や体育会の発展にも資したわけですが、全体的な学位授与とその基準評価に関しては、そこからやや離れてしまった。その辺のところをどうしていくかというのは、学部と体育研究所が教育に関わる上での関係をどう取り結んでいくのか、これが1つの課題になるのではないかと思います。

また、須田先生のお話は、「スポーツというのはとにかく楽しむことが本質にあるべきだ」ということで、確かに人間が身体を動かすことには原始的な喜びがありますので、そのことを大切にします。もう1つは、大



長谷山 彰氏 (撮影 井上 悟)

学として地域に貢献する「地域交流」の中で、1つのハブとしてスポーツを通じた地域交流、地域貢献を行っていくことについての提言だったと思います。

また、それを通じて、大学としては学生に対する教育効果、特に「半学半教」といういわば福澤諭吉以来の義塾の教育方針を再確認する。さらに、学生の社会性の涵養ということに心掛ける。これはまさに義塾の教育方針にも合致することであります。福澤という人はこれまでも多くの皆さんがおっしゃいました通り、まず健康な体（獣身）をつくって、その後で人心を養い、知を発展させるということを重視しました。そしてそれ以外にも、「世の中にて最も大切なるものは人と人との交わり付き合いなり。是即ち一つの学問なり」という言葉を残しております。あるいは、「書物を読むだけの教育を幼少から行えば友と群れることあたわず。そのようなものは家のためにも国のためにも無用の長物なり」という大変強烈なことを言っておりまして、学生の社会性の涵養ということを常に心掛けていた人物です。今の義塾の場合にも、大学生が教室にこもって座学に打ち込むだけではなく、社会性の涵養ということに心掛ける。それは体育研究所の教育の在り方としても、いっそう求められるべきであろうと思います。

また、村山先生のお話はそうした「楽しむ」に加えて「学ぶ」という姿勢について、大学におけるスポーツはやはり教育とのかかわりにおいて行われるべきだという本質的なことをご指摘いただきました。ご紹介された中に、最近では世の中の方が「学習力に心身の健康を加えよ」と提言を打ち出しているということが

ありましたが、これも慶應義塾では福澤以来、根本に据えてきたことですし、現在でも受け継がれております。一番象徴的な事例としては、大学学則の「入学試験」の条文を見ますと、入学選考の基準として「学業成績と人物と健康」ということが明記されております。現在の一般入試ではその入試形態を通じて受験生の健康、心身のバランスの取れ方を測るということはできないわけですが、とにかく選考基準に健康というものを置いている。これは狭い意味での健康を要求しているのではなく、やはり心身の発達、精神と身体のバランスということを教育の場で重要視しなければならない。こういう福澤以来の伝統が象徴的に学則に反映しているのだと思います。そうした方向を今後も模索していく必要があると思います。

ただ、必修化という方法でそれを実現できるかどうか、これは両刃の剣でありまして、体育研究所の歴史を見たときに、1991年の大学設置基準の大綱化によって、その後、義塾でも体育が必修から選択制になりました。そのときにメリットとデメリットがあって、つまり、選択化によってすべての学生に体育を体験させられないというデメリットが生じたけれども、しかし他方で必修時代には大部分が1年生でしたから、それが終わると2年、3年、4年は日常的にスポーツに触れることはなかなかできなくなっていました。これが選択化されたことによって、カリキュラム上は1年生から4年生までがきちんとした指導の下にスポーツ種目を学べることになったわけで、そうしたこととの整合性をどう考えるかということが再必修化を考える上での課題になるのではないかと思います。

そのほかに、これから義塾の体育教育をより充実させる上で心掛けなければいけないこととして、1つは慶應義塾が一貫教育を持っているということ。この一貫教育は一般的には小学校から高校までを指しておりますが、私は一貫教育というのは小学校から大学、ないしは大学院までというのが義塾の一貫教育と思っておりますので、そうした中で体育教育をどう活かしていくのかということが課題になると思います。

もう1つは高齢化社会の中で生涯スポーツ、これを通じて健康な長寿社会を実現すること。そのために大学生のうちから心身の健康に関する知識をきちんと身に付けていくことと社会人への教育が必要だと思えます。

こうした教育は一般的には正課教育と課外教育のバランスの中で実践すべきだとされていますけれども、実は個々の科目でこの正課と課外の要素を両方含んだ教育として実現するのが理想であり、かつ難しいというのが現実です。しかし体育科目の場合には、体育研究所が設置されている科目には、講義科目の他に実技科目があって広い意味での正課と課外の要素が組み込まれているという利点がありますので、そういう意味で体育科目の充実に非常に期待しています。

そんなところを感想として申し上げまして、私の話はこれぐらいにして、もう少し具体的にご議論いただければと思います。よろしく願いいたします。

**司会：**ありがとうございます。それでは、フロアも交えてこれから質疑応答という形で進めたいと思います。

**師岡：**上智大学保健体育研究室長の師岡と申します。本日は体育研究所設立50周年、誠にありがとうございます。また、今日のこの素晴らしいシンポジウムを我々のような部外者に公開していただいたことに感謝申し上げます。

私も村山先生と同じく全国大学体育連合の常務理事を務めさせていただいております立場から、大変僭越ではございますが、慶應義塾大学にお願いコメントをさせていただきます。それは、村山先生からご提案がありました体育の再必修化を是非実現させていただきたいということです。と言いますのは、慶應義塾大学という大学は福澤諭吉先生から始まり、これまでも日本の大学体育を常にリードしてこられ、「慶應義塾大学の体育がどうなっているか」ということが他の私立大学に多大な影響を及ぼし、本当に日本の大学教育に大きな影響力を持っていらっしゃるからこそ体育の再必修化をお願いしたいのです。

先生方もご存じの通り、今、大学卒業生の30%近くが就職して3年以内に職場でコミュニケーションがうまく取れずに退職してしまうという現象が起きています。こんなに就職が厳しい中でやっと就職できたのに、上司に叱られたぐらいで辞めてしまうという現象が少なからず起きています。これは今の学生が一人っ子だったり、親に叱られたことがなかったり、複雑な環境にいるとか、我々大人がそういう子供を育ててしまったという責任を負っています。このことをすべて体育

で解決できるとは思いませんが、ほかの科目を見渡したところで、例えば「コミュニケーションスキルを上げていく」「人のために何かをする喜びを体験する」「共生」など、そういった人として生きていく基本を実体験し、実学として学べる教科が他にあるかというところはありません。理論的には、倫理学だとか宗教学、哲学など、いろいろな分野で学ぶわけですが、体育は、実体験として、先ほど村山先生が紹介された「自己効力感」を実学として学べる場であり、また先ほど清家塾長のお話にもあった、友との出会いの場として貴重です。

先ほど第1部でご発表がありましたように選択で好きなきときに受講できる現行制度の良い点もありますが、受講生の数が大変失礼ながら年々減っておりますよね。せっかくこれだけ素晴らしい種目を並べながら、就職が厳しくなるなどの状況になりますと、「直接関係がない体育科目で時間を費やすよりも」ということがやはり起きてきます。となると、1年生の最初に体育を必修にしないと、受講してほしい学生が取りに来ないのです。人とかかわることが嫌という学生は体育の授業はまず取りません。しかし本当はそういう学生こそ体験してもらって、コミュニケーションスキルやチームビルディング体験を身に付けてもらって社会に出さないと、せっかく社会に出ても役に立たないという人材を我々は排出してしまうということがあると思います。

『設立50年記念史』には、つかみ合いの議論までなされたということが書かれておりますけれども、再度また熱い議論をしていただいて、今この時代だからこそもう一度体育が必要だということを決断していただきたいと思います。

実は、東海大学が体育を再必修化しました。来年(2012年)、体育学会でのシンポジウムでは「なぜ東海大学がもう1回必修に戻したか」ということをテーマに開催する予定で、現在準備を進めているところです。いろいろな事情があたりになるとは思いますけれども、是非前向きに検討していただきたい。私どもが今、全国大学体育連合の会長に仰いでおります安西前塾長も「塾生皆泳を再復活させたい」ということをおっしゃっています。それはやはりご自身のご体験からあらためてお考えのことだと思いますので、是非考慮に入れていただければと思っています。

最後になりますが、大綱化当時の石川塾長は体育は大事だとおっしゃった一方で、私どもの上智大学の学長は

大綱化が発表された途端に「うちは体育をやめる」と外部のシンポジウムでいきなり発言いたしました。それで我々は本当に猛反発しまして、各学部教授会と話した上で、「ウエルネス」と「身体知」というコンセプトを出しました。これはフィジカル、メンタル、ソーシャル、まさに先ほど長谷山常任理事がおっしゃったようなコンセプトを「体育でやるんだ」ということです。これは各学部教授会に絶賛を受けまして、それから18年が経ちますけれども、今は「体育は必修じゃなくていい」ということを表立って発言する教員は誰もいなくなりました。

学生もやはり履修する前は体育必修は嫌なのです。「何で大学まで来て体育は必修なんだ」と。しかし、終わった後でのアンケートを全数調査で取っているんですが、「なるほどこれは意味があった」「強制されなかったらこういう体験はできなかった」といったコメントが多く見られます。中身としては、半分近くは「コミュニケーションスキルを磨く」内容になっています。

長々としゃべって失礼致しましたが、慶應義塾大学体育研究所が50周年を迎えたところで、もう一度必修への議論をやっていただきたいというお願いのコメントをさせていただきました。

**司会：**ありがとうございます。慶應義塾大学という名前はとても大きくて、私どもも大学体育連合の合宿や大学スキー研究会などに行きますと、「慶應がだめになるとうちもだめになるだろう」という話が絶えずありました。なかなかその辺は難しいと思いますが、ぜひ我々が頑張っていきたいと思います。ところでどなたか今の話に何かコメントはありますか？

**加藤：**「体育の授業」に関する今のお話に関して、例えば、「競技スポーツ」と「生涯スポーツ」の予算配分をどうすべきかなど、個人的には少し違った観点から考えていることはあります。

例えば最近の社会科学では「幸福」ということについて正面から議論するようになってきています。

もともと人間の感じる幸福感に関しては、因果関係の特定や、測定が困難だということで、社会科学の対象としてはあまり論じられてきませんでした。しかし、先日ブータン国王夫妻が来日された際にも話題となりましたが、ブータンでは先代の国王が「国民総幸福」という概念を唱え、現在では世界的に注目されています。

ところで、自己効力感が高い人のほうが幸福な生活を送っていると感じやすいということは、非常に抽象的な話ではありますが、多くの人に同意いただけるのではないのでしょうか。スポーツをやってストレスを解放する、病気とは無縁の人生を送る、こういったことは、直接「幸福な生活」につながることで、従って、身体活動を習慣づけるような体育の授業を展開していくことは、非常に意味のあることだと思います。

また、一般的な座学の授業と違って、体育の授業では自分を曝け出さなければならないことが多々あります。ある意味これが体育の授業の大きな特徴の一つではないでしょうか。そのことが、学生にとっては人間関係を形成し、社会的スキルを向上させていくチャンスにもなるわけです。今の学生を見ていると、このような場を大学の初年時教育として設定しておくかどうかで、卒業時に大きな違いが出てくるのではないかと感じています。

もちろん体育が必修化されることによって、全てが良い方向に向かうとは思いませんし、個人的にも、必修化に諸手を挙げて賛成というわけでもありません。しかし、体育の効用をもう少し正面からとらえて議論していく必要性はあるのではないかと考えています。

**司会：**ありがとうございます。今、お話があったことに関してですが、教養研究センターでは「身体知」という言葉を使ったプロジェクトもやっておりますし、以前、私も一緒に仕事をさせていただいた中で、コミュニケーション能力を高めるためにアカデミックスキルズなども展開しております。今日は不破所長が来られていますので、コミュニケーションスキルあるいは身体知という観点から一言お願いできればと思います。

**不破：**教養研究センターの不破です。うかがっていて私が非常に関心を持ちましたのは、たまたまこの間、企業の方々と学生とのシンポジウムに参加したのですが、そこで富士ゼロックスの方が「学生、大学の間に求められていること、もしやってほしいことを1つ挙げるとしたら何か」と言われたときに、「まず困難にぶつかって、それを乗り越える体験をぜひしてほしい」とおっしゃっていたのが非常に印象的でした。企業側においても、研修で入ってきた新入生に向かって非常に厳しい特訓をすると訴訟が起こるのでできなくなっ

てしまったようです。つまり、即戦力をつくらなければいけないはずの企業においても、苦勞させることを研修というレベルではできなくなってしまっている。だから「大学でせめて何か困難にぶつかって、それを苦しくてもいいから乗り越えた体験をさせてほしい」というその一言が非常に重要だと私は思いました。

つまり体育やスポーツに限らず、学問のレベルでももちろんありますが、本当に大変なときに先生に怒られたり、「これはおかしい」ということを本当に率直に言い合いながら、それを乗り越える場が必要なのではないかと思います。教養研究センター設置の科目「アカデミック・スキルズ」では議論の場や論文作成時に「大変なことを乗り越える」という体験をしていますが、やはり身体的な意味で実体験させることは非常に重要だと思います。ですから、単に言葉の意味での教育だけではなく、それを本当に理解するためには、やはり体をしっかり使わないとできないということを強く感じていらっしゃる方がたぶん大学側にもたくさんいらっしゃると思います。本当に難関を乗り越えるという意味での課題を体育研究所においてももちろんぜひご尽力いただきたいですし、教養研究センターでも、乗り越えるハードルをしっかりとつくって、それを乗り越えるための指導を身体と心と頭を駆使して行っていければと感じております。

大学教育を今後どうしていったらいいのか考える場を設ける必要性を、私も教養研究センターの立場から感じております。今年は特に厳しい年でありましたので、今後の大学教育についていろいろなレベルで、あるいは学部を超えたところで真剣に議論して、それをカリキュラムに返していくことが本当に求められているのではないかと思います。体験という観点から、皆様のご意見をぜひいただきたいと思っております。とにかく設立50年という素晴らしい歴史を刻まれたこのシンポジウム開催におめでとうございます、というご挨拶を最後に申し上げて終わらせていただきます。

**司会：**ありがとうございました。スポーツがアスレティズムの方向に向かうところではそういった乗り越える心境があり、そこで我々は意識が高まっていくというところもあります。しかし、それが変な方向にいくと、先ほどの加藤先生の話のように、勉強しない、「スポーツだけあれば」のような話になってしまい、そういう問題でもあるという気がします。そういったとこ

ろは、我々大学の教員と理解をしていくべき者がきちんといい方向性を身に付けていかなければいけない、という思いであります。

**村山：**村山です。長谷山常任理事のお話から早速、必修化のお話になってきていますが、今の不破先生のお話と合わせて、必修化という意味ではやり方はいろいろなことが考えられると思います。ですから、私は昔のように1年生が全部履修するという形が必ずしもいいとは考えておりません。今日お話ししたところでちょっと勘違いしないでいただきたいのは、私はスポーツ文化を伝える役割があるということと、学生を育てるということについては、2つの方法があるので、スポーツ文化さえ伝えればいいという側面と人を育てるということは別だと思っているんですね。

人を育てるということについては、少し前に薬物の問題が出たときに留学生に薬物教育をしようという話がありました。そういった点では、初年次教育でコミュニケーションや、社会性、体のこと、薬のこと、このようなことをコアにした、やらなければいけない科目を「塾生が全員履修する」というコンセプトの中に体育の本質が伝わるならそれでもいいという考え方もあると思います。

スポーツの価値も伝えなければいけないという意味では、これを学部4年間や大学院、あるいは一貫教育からでも、本当に日常でやっていく価値のあるものかどうかということでスポーツを学んでほしいという場も必修としてあってほしいと思います。ですから、やり方はいろいろな形があると思います。しかし、師岡先生もおっしゃったように履修者も減ってきてまして、私も合宿などで授業を毎年担当しますが、いわゆる生活力がない学生に直面するわけです。そうするとアウトドアの授業に行くと、とても高度な人間活動である料理を作ることをやらせるんですね。そうすると、したことがないと何もできないわけです。これが体験となって生活力が付いていくという、ごくごく基本的なことも体育でできるわけです。しかし、それに來てくれる学生はまだいいわけですが、まったく我々に触れない学生が山ほどいるということは、とても不安なわけですね。これを何とかして生活力を上げさせてあげることに貢献すべきなんだろうということが側面とし

てありますが、世の中もスポーツは大事だと言っているので、地域スポーツクラブを活性化した方がいいと思います。

須田先生が言うように、新しい形の組織が地域と一緒にになったら、その場は大学生も一緒にやる授業になってもいいと思います。大学生と地域の人が一緒に須田先生の授業を受けて、それで子供と一緒にやることもあるでしょうし、お年寄りと一緒にやることもあるでしょう。これも大学のタイプの1つだというやり方も必ずできると思います。そういう可能性は広がると思いますが、必修という言葉だけに引きずられてもいけないし、ただスポーツをやればいいというわけでもありません。

最後にもう1つ。我々体育教員はちょっと考えなければいけないと思うのは、我々はわりとスポーツをある程度得意にやってきたので、スポーツを教えている自分をカッコいいと思っていると思います。僕も思うんです。教えているときは気分がいいんですよ。しかし、スポーツを通じて教育をするというと、言い方は語弊があるかもしれませんが、できない子を手取り足取りいろいろなことで面倒を見てあげているというのが教育ですので、とても手の掛かる大変な仕事をやることになります。一方的に、俺は「何々がうまいからまねさせているよ」というのでは済まないのがこれからのタイプの教育の使命ではないかと思います。そのような時代になりましたので、これが必修という形になるのであれば、手取り足取りの授業も一生懸命やらなければいけない、ということが私の言いたかったことになりますので、その辺をお含みおきいただいてまた議論をお願いしたいと思います。

**司会：**それでは、ほかに何かご意見などございますでしょうか。

**織戸：**非常勤講師として軟式野球を担当して3年目になります織戸と申します。私が非常に感じるのは、塾生としてお互いに面識のない、知らない者同士が短期間に知り合って親睦を深めるということは、見ていて実感として感じています。この点で体育の授業というのは私はものすごくいいと思います。

私のクラスでも30人の履修者がいて、野球経験者から未経験者までおりまして、レベルがかなり違います。

途中から紅白戦などやりますが、未経験者というのは本当に野球を経験したことのない子がいます。まともにボールも捕れない、それから実際にボールが来ても打てないことが長くなってくると、「ああ、この子はたぶんこれで嫌になっちゃうのかな」と思って見ていたのですが、結局その子は「どうしたら打てるのか」、「どうしたら捕れるのか」ということをたぶん考えたと思うんです。そうしてこの間の紅白戦で初めて彼がヒットを打って、みんなが拍手しているわけです。彼はものすごくうれしい顔をしているし、僕もものすごくうれしかったです。さっき塾長もおっしゃっていましたが、そういった面で、授業を通して考えることが実際に行われているということはものすごく感じました。

それから、私はこの夏まで慶應高校の軟式野球部の監督と並行して大学の非常勤講師をやっていたのですが、はっきり言わせて非常勤講師の方が精神的には楽なのですね。と言いますのは、高校の監督というのはある程度勝たせたいという気持ちがあるから、どうしてもプレッシャーも感じますし、指導もかなり厳しくなります。しかし、体育の授業というのはある程度、親睦を深めながらみんなが仲良く、野球を楽しむという観点で授業をやっていたので、そういった面で自分としては楽だった気がいたします。

また、大学生にも、「好きな野球を授業で楽しみたい」、「日ごろなかなか運動する機会がない」という人もいまして、そういった意味では日吉台球場に行って大学の体育会準硬式野球部と慶應高校の硬式野球部が使うグラウンドを使ってやれるということでも非常に感謝していました。あと、実際に体育会準硬式野球部員を3名、補助員としていつも来てもらっています。それは自分がノックするとき、当然1人では足りないので、彼らにノックを手伝ってもらったり、あるいは紅白戦のときにボールボーイやバットボーイなどをやってもらったりしています。私が大学生のときは必修科目でしたが、私は体育会に入っていたので体育の授業は取りませんでした。もし必修になった場合、体育会の部員にも授業を手伝ってもらおうというのも1ついいんじゃないかなと感じています。実際、アンケートをとると、学生から「準硬式野球部員に手伝ってもらって非常によかった」というコメントも出てきています。しかし、授業と言う面では、やはり単位が1というのはちょっと不満そうな学生が何人かおまして、もうちょっと

単位を上げた方がいいんじゃないかということも気が付きました。以上です。

**司会：**ありがとうございました。そのような観点から見えていかなければいけないところもありますね。それでは他の方はどうでしょう。

**宮田：**慶應義塾高等学校体育科の宮田です。体育研究所設立50年、誠におめでとうございます。これまで塾内外での体育、スポーツへの貢献に敬意を表します。これからも体育研究所がリーダーシップを取っていただき、諸学校の垣根を越えた楽しい企画を作っていただければと思います。

大学体育必修化についてですが、高等学校教員としても是非、お願いしたい所であります。高校3年の最後の授業で「これが、君にとって最後の体育授業になるかもしれないよ。」と話をすると高校卒業を目の前にした生徒はすごく残念がるんですよ。運動意欲のある者は大学でも体育研究所設置科目を履修すると思いますが、普段なかなか運動機会が無く、本当はスポーツをしてもらいたいと思う学生が、実際はなかなか大学では体育を履修しないと思うんですよ。そういう意味では、大学時代においても必修という形で体育ができる環境があるのは良い事なのではと考えます。

私はトランポリン実技を1コマ担当させていただいていますが、最近の大学生の傾向を見えますと数年前よりも幼くなって来た様に思える半面、大人の振る舞いのできる所もあります。塾高生にはなかなか受けない私のギャグも大学生の反応は上々で、私も楽しく授業をさせていただいております(笑)。

授業では1年生から4年生までの履修者がおり、学部も様々で年齢やバックグラウンドを越えてトランポリンを通じ、交流してくれています。これも体育実技ならではのですね。

セクハラ問題などが多く取り上げられる現代では、スポーツの場面における身体接触には、教える側としても、学生も神経を使いますが、いくつかの注意を与えた後、あえて手を繋いでやらなければならない運動場面を設定します。運動での身体接触に恐れを抱かせないためです。授業終了直前には、互いにスポーツマッサージをさせます。こちらは男女を分けますが、こういう形でコミュニケーションを取れる授業はおそらく



く体育実技だけかと思えます。2～3回授業をやりま  
すとクラスの雰囲気は非常にいいものになります。た  
だ運動をしたいという欲求だけではなく、コミュニケー  
ションをも楽しむようになってくれます。これもまた  
体育実技の良い所と考えております。

以上、私が体育研究所の講師を務めさせていただき、  
感じた事を話させていただきました。

今後、益々の体育研究所、発展を祈念いたします。

**司会**：ありがとうございます。今日はスポーツ医学研  
究センター、それから保健管理センターの方からもお  
越しいただいていますので、今までずっとコラボレー  
ションしていたところということで、齊藤先生お願い  
いたします。

**齊藤**：保健管理センターの齊藤と申します。必修化に  
ついての話題が出ましたけれども、ぜひ長谷山先生に  
ご英断をお願いしたいと思います。長谷山先生の鶴の  
一声で、清家先生も一緒にぜひとも進めていただき  
たいと思います。

薬物乱用などを含む必修のコアプログラムについて  
数年前に非常に盛り上がったのですが、いろいろな事  
情で実現しませんでした。まだ遅くないので、ぜひ思  
い切ってやっていいのではないかと思います。コアプ  
ログラムの有効性について「エビデンスを出せ」と言

われるかもしれません。例えば、その授業をやれば薬  
物での逮捕者がなくなるですとか、そういったエビデ  
ンスがあれば誰でも賛成すると思いますがそれは極めて  
困難です。ぜひ今日のお話を学部の皆さんにご理解  
いただき、個別の利害を越えて必修化を進めることが  
非常に重要だと思います。

**司会**：ありがとうございます。それでは、いつも一緒  
に仕事をしていますスポーツ医学研究センターから勝  
川先生、お願いします。

**勝川**：スポーツ医学研究センターの勝川です。お話を  
おうかがいさせていただきまして、これは人間力の低下  
といっても良いのではないかと思います。おそらくは、  
長い歴史の中で、体育だけでなく複合的な要因によっ  
て起きているものと思われます。本来は、小中学校のレ  
ベルできちんと対応しなければならない問題が、最終的  
な補正として大学でやらなければならないようになってい  
る状況で、慶應義塾として取り組む意義は非常に大き  
いと思います。

運動だけでなく、私どもが最近、体育会学生の状況  
を見ていて感じるのは、「食」が非常に貧しいのですね。  
これは体育やスポーツにおいてもたいへん重要なところ  
ですので、運動と食事、両方をあわせて考えていく  
べきであろうと思います。慶應義塾の場合、栄養学を専



門とする学部がないので実際には難しいのですが、食事も含めて、身体を使って体験するようなカリキュラムを立ち上げて良いのではないかと感じました。

**司会：**ありがとうございました。これにてシンポジウ

ムを終了したいと思います。それでは皆さま、長い間どうもありがとうございました。

---

慶應義塾大学体育研究所  
設立 50 年記念シンポジウム報告書

---

2012年3月31日発行

編集・発行 慶應義塾大学体育研究所

代表者 植田史生

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL.045-563-1111(代表)

<http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

表紙企画及びデザイン 株式会社アド・プリント

濱田竜哉、高橋和弘

印刷・製本 株式会社太平印刷社

---

©2012 Keio University Institute of Physical Education  
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。